

事故物件の怪異が

好みすぎて我慢できない

藤 時生

# ご利用について

本作品は購入者・支援者限定のコンテンツです。

作品内の文章・画像・データ等の無断転載、複製、配布、販売、共有を禁止しています。

また、本作品を作者の許可なくAI学習用データとして利用することは禁止しています。

個人で楽しむ範囲での閲覧・保存をお願いいたします。

本作品の著作権は作者に帰属します。

作品を楽しんでいただけましたら、今後の創作活動への応援をいただけますと幸いです。

# 作品について

本作品は18歳未満の方の閲覧を禁止しています。

性的表現を含む成人向けBL作品です。

苦手な方は閲覧をお控えください。

また、本作品はフィクションです。

登場する人物・団体・設定等は実在のものとは関係ありません。

# 目次

第一話（無料公開分）

第二話（無料公開分）

第三話（無料公開分）

第四話

第五話

第六話

第七話

第八話

# 第一話

【首の折れた男(家にまつわる怪談話)】

『俺ん家の近くに、“絶対に人が住み着かない家”がある。

入居者は全員すぐ出てく。

理由は、その家に“首の折れた男”が出るから。

住宅街の一角にある、庭付きの一戸建て。そこそこデカくて駅からも近い。なのに値段は激安。たまに人が入居するんだけど、みんなすぐ出ていく。

結局、俺が子供の頃からずっと空き家のままだ。

昔、引きこもりの男が親を殺して、自分も首を吊ったらしい。

だから近所じゃ、

「家族の幽霊が出る」

って噂されてた。

でも、その噂が本当だって分かる事件が、去年あった。

近所の不良グループが、夏休みにその空き家へ肝試しに行ったんだ。

夜中の一時。コンビニで酒買って、五人で侵入。リビングの窓を割って入ったらしい。当然、電気もガスも止まってる。

でも妙に一階だけ綺麗だったって。リフォーム済みみたいに。なのに、二階へ続く階段だけ異様だった。

壁紙は剥がれ、手すりは黒ずみ、カビ臭い。途中で右に曲がる階段なんだけど、踊り場の上だけ妙に暗い。

「うわ、絶対出るやつじゃん」

最初はそう言って笑ってたらしい。とりあえず一階から見ようってなって、全員で風呂場へ行った。

そこも綺麗だった。窓から街灯の光が入って、薄暗いけど周りは見える。

「広っ」

「うちの風呂よりいいじゃん」

そんなこと言ってたとき、一瞬だけ、風呂場が暗くなった。同時に。

——ゴシヤッ。

すぐ外から、重いものが落ちた音。全員、黙った。

「……猫だろ」

一人が半笑いで窓を開けた。身を乗り出して外を見る。

「誰もいねえ……」

でも、その辺りから空気がおかしくなったらしい。湿っぽいというか。息が詰まる感じというか。

その時。二階から、

ギ……ギ……

って音がした。誰かが歩くみたいな音。でも全員、一階にいる。

「……帰ろうぜ」

誰かが言って、みんな無言で廊下へ出た。そこには、あの階段がある。

一人目、二人目はさっさとリビング側へ逃げた。三人目が、何となく階段を見上げた。それで止まった。

「……誰かいる」

全員、階段を見る。踊り場に、男が立ってた。見えたのは足だけ。裸足。泥だらけの足。顔は天井に隠れて見えない。

「お、おい！ 誰だよ！」

三人目が叫んだ瞬間。男は、ギ……ギ……って音を立てながら、二階へ上がっていった。

「ビビらせやがって！！」

恐怖をごまかしたかったんだろうな。三人目が怒鳴りながら階段を駆け上がっていった。

その直後。二階で、

ドタンッ！！

ってデカイ音がした。そのあと。

ゴキン。

って聞こえた。

次の瞬間、三人目が転がるように階段を降りてきた。

「いた！！いたって！！」

半泣きだった。

「クローゼットから出てきた！！」

「首が！！」

「首折れてた！！！」

全員パニックで玄関へ走った。

でも、開かない。鍵は開いてるのに、ドアが壁にくっついたみたいに動かない。全員で泣きながら体当たりしてたとき。

後ろから。

ギ……ギ……

って音がした。

振り返ったら、男がいた。階段の途中に。

デカイ男。

首が、ありえない方向に曲がってた。白目を剥いて、口から泡を垂らして立ってた。

「う……うゝあ……」

唸るような声が聞こえた瞬間、一人目が金属バットを投げた。

ガコンッ！！

って音がして、男が仰向けに倒れた。

その瞬間、玄関が開いて、全員悲鳴上げながら逃げたらしい。

で。

次の日から、一人目は学校に来なくなった。

家に様子を見に行った奴が言ってた。

夜中になると、部屋のクローゼットに向かって、ずっと誰かに話しかけてるらしい。

「ごめんな」

「痛かったよな」

って。』

-----

軽快な着信音が、久我 迅の眠りを妨げる。だっ広いリビングの真ん中に敷いた布団の中から腕を伸ばしてスマホを手に取り、薄目で見ながら通話ボタンを押す。

『迅？俺だ』

「ああ……兄ちゃん……？」

『まだ寝てんのか、今日はいい天気だぞ』

「ああ、うん……」

電話口で、兄の久我真が喋っているのを迅はウトウトしながら聞いていた。

5日ほど前から、迅は一人暮らしには広すぎる一軒家に住んでいた。3LDKの、庭付き一戸建て。妻子がいるわけでもない迅がここへ住んでいるのは、電話をかけてきた兄からの指令だった。

曰く、この家に怪奇現象が起きているというからしばらく住んで検証してほしい、とのこと。

兄はいわゆる不動産投資をやっていて、その縁で購入した一軒家だった。よくない噂があるのは知ったうえで購入し、弟に検証させ、怪

奇現象が起きないことが証明されれば良し、万が一怪奇現象が起きればそういう『触れ込み』で話題にしてやろうという心積もりらしい。

兄からの条件は二つ、毎日自宅で眠ることと、定期的な報告を欠かさないこと。

『仕事もしてねえんだから、暇だろお前』

そんな風に言われてカギを手渡され、迅は住む場所と生活費をくれるなんて自分は良い兄を持ったんだとウキウキで入居した。

『頼むぞ、迅』

「あいあい、分かってるよ」

電話が切れて、迅は枕に突っ伏す。真っ白い枕カバーは嗅ぎなれない洗剤の匂いがして、引っ越しを機に洗剤を変えたのを思い出す。

「んゝ～～……起きるか……」

のそ、と体を起こした迅は枕元に置いている黒ぶち眼鏡をかけて立ち上がった。全身を伸ばして伸びをする迅の目に、家具一つないダイニングと殺風景なキッチンが映る。

迅が布団を敷いているのはリビングで、そこにアパートに住んでいたときのローテーブルとテレビ、タンス代わりのカラーボックスと衣装ケースを置いている。生活必需品がほとんどその程度しかなく、続き間になっているダイニングには何も置いておらず、僅かな調理道具が置かれているキッチンがあるだけだった。廊下を挟んだ風呂場とトイレには一応多少のものは置いてあるが、二階は全くの手付かずだった。

それもそのはず、兄から滞在時間は長くて一か月と言われているし、ここは他の人に貸し出すために購入した物件なのだからあまり汚すなちゃんと掃除しろと言われている。

「まあ、掃除ぐらいやりますけどね」

とはいえ、家賃光熱費なし、生活費の負担ありの1か月は迅にとってはありがたい。何しろ、彼は無職だからだ。勤めていたバーで迅を巡って色恋沙汰が起き、穩便に済ませるためにセクシャルをばらしたらさらにヒートアップした相手に切りつけられたせいだ。迅は被害者なのだが、そのまま働き続けると相手がまた現れるかもしれないということで辞めた。代わりに別のバーを紹介すると言われたが、この機会にしばらくのんびり過ごそうと思い返事は保留してある。そんなときに兄からこの合法ニートの話が舞い込んで、飛びついたわけだった。

スマホで時刻を見れば14時を少し過ぎたところだ。昨日は深夜まで酒を飲んでいたため、まだ頭の奥が重く、少し痛みを感じさえる。二

日酔いとは少し違った痛みに顔をしかめながら冷蔵庫の中のミネラルウォーターをがぶ飲みし、長時間の睡眠で固まった首をグルグルと回してほぐした。抜けていかないだるさと酒臭さに顔をしかめて、迅はキッチンと廊下を挟んだ向こうにある風呂場へ足を向けた。

適当に服を脱ぎ捨て眼鏡を外し、風呂場へ入る。シャワーのコックを捻ると、冷たい水がすぐにゆっくりと温度を上げて迅の体を滑り落ちていった。

「っはあ～……」

低く息を吐き、濡れた黒髪をがしがしと掻き上げる。短く切った髪は水を含んでも重たくなり、硬さもあるため額の方から掻き上げるように撫でつけてもすぐに立ち上がった。

迅はもともと肌が焼けやすく、学生時代に外で遊び回っていた名残か、三十路手前になっても腕や首筋にはうっすら日に焼けた色が残っている。そのせいで、白い浴室灯の下でも妙に生々しい体つきに見えた。

泡立てたシャンプーを頭にぶちまけながら、迅は鏡を見る。

湯と泡が混じった流れが鎖骨を滑り、胸を伝い、腹筋へ落ちる。筋骨隆々、というほど鍛えているわけではない。だが、重心が低く、妙にどっしりしている。厚い胸板と太い腕には喧嘩慣れした男特有の圧がある。兄からは『チンピラみたいな体つきしやがって』とよく言われるが、実際否定はできなかった。

三白眼気味の鋭い目。口元にはうっすら無精ヒゲ。親しくもない他人に振る愛想はなく、お上品なタイプでもない。初対面の人間にはだいたい怖がられる顔だ。

「……我ながら感じ悪い顔」

呟いて鼻で笑う。とはいえ別に自分の外見が嫌いというわけではない。睨みの利く目つきは気に入っている。変な舐められ方をされずに済むからだ。

バーテンという職業柄、ちょっとばかり荒事に鉢合わせることもある。そういうときは特に、自分の見た目は有利に働く。

それともう一つ、この男くさい外見は男にモテる。

世間一般の女性からは怖がられ遠巻きにされる。だが、迅の好みは男だ。男らしい見た目はむしろ好まれる方だった。

時には強面が好きだという女性に言い寄られることもあるが、華奢な体や自分より低い身長はどうにも興奮しない。

どうせ抱くなら筋肉も脂肪もむっちり乗った大きな男がいい。そういう男が、男に口説かれて組み敷かれて羞恥と快感に塗れて晒す姿が何よりも興奮する。

行きつけの店で引っ掛けて、ホテルで濃厚な時間を過ごす。気に入ったらときどき連絡を取り合って、好きなときにまた会う。そういう生活を過ごしていた。

なのに、もう何日もそういう出会いがない。

「……はあ」

兄に頼まれて事故物件へ住み始めて数日。連れ込むのは禁止されていて、誰も引っ掛けていない。性欲だけが無駄に蓄積していた。

別にすぐにバレるわけじゃないだろうと思ったが、玄関先に設置されている防犯カメラは兄が見られるようになっているらしい。そう言われてしまえば、コソコソと忍び込ませるのも何だかバカらしくて結果的に禁欲する羽目になっている。

夜は必ず自宅で寝ろと言われているから、外泊もできやしない。

溜まった欲を吐き出すために自分のチンポを握った、

その時だった。

——ゴシャリ。

「……あ？」

浴室の外から、何か重たいものが落ちる音がした。湿った土嚢が高いところから落ちたような、重たい嫌な音だ。

シャワーを止めて耳を澄ますが、それ以上の音は聞こえてこない。

事故物件だなんだと散々脅されていたせいで、最初は妙に神経が立っていた。だが数日住んでみた限り、今のところ変なことは何一つ起きていない。拍子抜けするほど普通の家だった。

だからこそ、今の音は妙に生々しく聞こえた。

最初は、誰かが敷地にごみでも捨てていったのだと考えた。

この辺りは住宅地で、人の行き来はさほど多くない。この家はずいぶん前から空き家が続いていたし、迅が入居したのは5日前だ。短期間だし面倒がって近所への挨拶もしていないから、この家に人が住み始めたと気づいている人は少ないだろう。

実際、空き家の時期には通りがかった誰かがごみを放り込んでいくことがあったらしい。

「人が気持ちよくシャワー浴びてるってのによお」

ぶつぶつ文句を言いながら、玄関でクロックスを履き護身用の金属バットを手にする。無地の黒Tシャツに同色のハーフパンツ、黒ぶち眼鏡で短髪の人相が悪い男。袖や裾から出る手足にタトゥーがないだけマシという程度のガラの悪さ。

大抵の不審者は逃げ出すだろう。

「不審者だったらぶん殴る」

玄関先のタイルを踏みしめると、ざり、と砂の擦れる音がする。音がした場所は、玄関からはちょうど真反対の位置にある。家の裏手だった。

角を曲がる時には一応頭だけ出して先を確認したが、人気はない。野良猫かと思いもしたが、落ちたときの音を思い出すと野良猫程度の重さではなかったようにも思う。

「……誰もいねえじゃん」

風呂場の窓のそば、家の裏手には何もなかった。雑草の入り混じる土に、何かが落ちたような痕跡もない。塀の向こうは隣の家の裏手の壁になっていて、そのあたりも人気はなかった。そもそも道に面していないので、ゴミを投げ入れることもできないだろう。

「何だよメンドクセエ」

出所のわからない音にイラつきながら、迅は足音高く玄関まで戻って家の中に入った。

ガチャリ、と音を立てて扉を閉めて鍵をかけた瞬間、空気の異質さに気づいた。

「……………」

リフォームを終えている家の1階はどこもかしこも綺麗だ。廊下は真新しいフローリング、壁紙も汚れていない白で、照明も明るい。

けれど、二階はまだ手付かずなのだとか。どうも、2階の改装を行う前に兄が噂を耳にして、もし怪奇現象が本当ならば古いままの方がよいのではと判断して中止したらしい。だから二階だけは、壁紙もフローリングも薄汚れていて、何となく暗く、湿っぽい感じがした。

二階には行かないからと、気にしていなかったそこからこの異質な空気が流れて、階段に背を向けて玄関扉の方を向いている迅の足元に流れてきているような気がした。

「へえ……」

これが噂の怪奇現象か。

手放す前だった金属バットを握り直し、迅はゆっくりと振り返る。目の前に何か出れば即横っ面をぶちのめしてやるつもりで、前腕にググっと力を込めていた。

「あ……？」

吸い込まれるように、視線が階段の方を向いた。外から玄関の扉を開けたときには絶対にいなかったはずの男が、二階へ続く踊り場に立っている。

天井に阻まれて上半身はほぼ見えないが、裸足の足だけが見える。薄暗い階段の途中で、じっとそこに立っていた。

「何だお前」

警戒心をわざと剥き出しにした大きな声で話しかけても、男はピクリとも動かない。こちらを窺っている様子ですらない。

ぼた、ぼた、と重みのあるものが床に落ちる音がした。よく見ると、泥の混じった水が男の足元に落ちている。

「人んち勝手に入ってんじゃねえぞ」

返事はなく、ただ汚水だけが階段へ落ち続けていた。空気が湿って、カビ臭いにおいがする。息苦しささえ感じるが、迅は苛立ちの方が強かった。

「廊下汚しやがって……！俺が怒られんだろうが！」

階段を上がって捕まえてやろうと一歩踏み出した瞬間、ギ……、と床のきしむ音を立てて男の足が動いた。そのまま、ゆっくりと階段を上がっていく。ミシ……、ミシ……と古い木の軋む音がする。

「待てコラ！」

迅が階段を駆け上がると、踊り場から先の階段に汚水と泥の足跡が残っている。踏まないようにしながら二階へ上がったとき、廊下の一番

奥の扉がギィ……と音を立てて少し開いた。足跡もその部屋に繋がっている。

「そこか？とっ捕まえて廊下の掃除させてやっから覚悟しろ」

薄暗く、古いままの2階は迅が廊下の明かりをつけてもなお、暗かった。リフォームしていないから当たり前だが、時代を感じさせる砂壁に手が当たるとぼろぼろ崩れて落ちる。

大股で廊下を進み、一気に扉を引く。すぐさま一歩踏み込むが、部屋の中には誰もいなかった。

「……隠れても無駄だぞ」

7畳程の洋間は、日焼け防止に兄が取り付けたカーテンのせいで薄暗い。フローリングの床は色褪せていて、壁には家具の跡が残っている。ガランとした何もない部屋だが、唯一、壁に埋め込まれたクローゼットがあった。だがそのクローゼットも扉は全開で、中には何も入っていない。

「いない？」

窓から逃げたのかとカーテンを開けた瞬間、バン！！と大きな音がして扉が閉まった。鼓膜を破るような音だった。

反射的に振り返った迅は、突然閉じた扉に駆け寄ってドアノブを掴む。

「は……？何だよ。開かない？」

ドアノブが回らない。力を込めても、ビクともしない。

「おい、ふざけんなッ」

誰に言うでもなく悪態をついて、扉を蹴る。蹴破るつもりでかなり強く蹴ったのに、扉は動きもせず人の足裏へ鈍い衝撃が返ってきただけだった。異様だ。古い木製の扉のはずなのに、まるでコンクリートでも蹴ったようだった。

バットを振り上げる。重い音がするものの、扉は動かない。傷一つ、ついていない。

「何だこれ」

眩いた迅の後ろで、ギ……、と音がした。木の床が軋む音だ。

「……………」

振り返ると、クローゼットの前に男が立っていた。つい今しがた誰もいないことを確認したはずなのに、音も立てずに現れた。次いで、迅が男を認識した途端、土の匂いがした。水の混じった腐葉土の匂いだっ  
た。

「お前、どこから……」

泥で汚れた裸足で、男は立っていた。薄汚れたスウェットが、太い脚に張り付いている。男は長身だった。177cmの迅が見上げる程で、どこかに隠れられたとは到底思えない。

「……へえ……」

汚れて濡れたスウェットがまとわりつく、どっしりとした腰。薄い布地のTシャツが包む、分厚い胸板。そして、首。

ぐにやり、と不自然に折れ曲がっていた。あり得ない方向に、骨がゆがんでいる。傾いだ頭から、長い黒髪が垂れている。

生気を失った土気色の肌、白目をむいた目から赤黒い血が流れている。

半開きの口から、ごぼり、と泡立った血混じりの唾液が溢れた。

「あゝあゝ……うゝ……」

男が呻く。低く、湿った声だ。ぐちゃ、ぐちゃと泥を擦るような足音を立てながら、男が一步ずつ近づいてくるのを迅は見上げていた。

かなりデカイ。おそらく180後半はあるだろう長身の男は、図体もデカかった。

「……………」

怖くなかったわけではない。さすがに、首の折れた死体が動くのは、迅だって初めて見た。普通の人間なら腰を抜かしているだろう。噂で聞いた『首の折れた男』というのは十中八九この男だろう。

だが、迅の脳裏に浮かんだ感想はたった一つだった。

(ヤベェ、クソ好みなんだけど)

怪異だか幽霊だかよりも先に、性癖が殴り掛かってきた。おまけに、そのえっちな姿態を余すところなく無防備に晒してこっちに迫ってきている。

決して迫ってはいないが、迅にはそう見えたのだから仕方ない。

「いやなんでそんなエロい身体してんだよ……」

首の折れた男は、真顔で呟いた迅の声など聞こえていないようにゆらりと手を伸ばした。長い指、爪の割れた大きな手だ。

その手が自身に触れそうになった瞬間、迅は反射的に動いていた。

「オラァッ！」

ドンッ！と金属バットの先が男の腹へ突き刺さる。今度はちゃんと手ごたえがあった。男の巨体が後ろへ吹き飛び、受け身も取らずに倒れ込む。

重たく濡れたものが倒れ込んだ音と同時に、ゴキンッと骨の折れるような音もした。

「あゝ、え……？」

肘をついて上半身を起こした男は、倒れ込んだ拍子に曲がっていた首が元の位置へ戻っているようだった。きょろ、と動かした目にうっすらと黒目が浮かんでいる。

状況を把握しようと辺りを見渡しているその姿は、さっきよりもずっと『人間』らしかった。

「っ……」

それを見下ろしながら、迅が男に一步近づく。気づいた男が、怯えたように息を呑んだ。

「何だお前、殴れんのか。そりゃいい」

殴り飛ばすことができるならこっちのものだ。そう思いながら、男の太い腰の上に体重をかけて勢いよく腰を下ろす。じわ、と数拍遅れで濡れた感触と男の冷たい体温が伝わってきた。

「っぐ、ううゝ……ッ」

「勝手に人んち入ってよお。俺の風呂邪魔したうえに、廊下汚して、タダで済むと思ってねえよな？」

「あゝ……」

近くで見ると、男は本当に迅の好みの体つきをしていた。肩幅が広く、胸板が厚い、Tシャツ越しでもわかるほどに。さらには脂肪が乗って、むっちりとした揉みごたえのありそうな身体だ。まさに性癖ど真ん中だった。

「はは、マジかよ」

思わず笑いがこみ上げる。怪奇現象の検証だなんて言って、性欲の発散もできないでいた自分に現れた怪異がまさかこんな身体を持ってやってくるなんて。

「お前何？幽霊？化け物？」

「え……うゝ……」

「まあ、だから何だって話なんだけどよ」

問いかけるたび、男の目が揺れる。自分でもよくわかっていないのか、迅の言葉すら認識できないのか。

腕を伸ばすと殴られるのを回避するみたいに肩を竦ませる。そのまま片手で両頬を掴み、ぐいっと上向かせた。

「へえ、怖いんだ？ いっちょまえに」

頬は思いのほか柔らかかった、無理矢理こちらを向かされた男は白く濁った黒目で見上げてくる。顔には怪異の不気味さと、人間みたいな怯えが同居していた。その反応が迅には妙に可愛らしく見えた。

「安心しろよ。殺しはしないから」

迅は男の顔を覗き込んだ。安心させてやろうと、口の端っこを吊り上げる笑みも浮かべてやった。

逆効果だったらしい。きゅ、と眉間にしわを寄せて眉尻を下げた男は泣きそうな顔をしている。

男はよく見れば見るほど、異様だった。肌は土気色で生気がない。目元に黒ずんだ隈がくっきりと残っていて、首の片側は皮膚が裂けている。その傷から血が流れることもなく、赤黒い肉をのぞかせているだけだ。

なのに、恐怖と困惑に揺れる瞳だけが、妙に生々しい。その黒目は白みがかって腐っているくせにだ。

「お前、声出んの？」

「……え、あ……」

まともな返事はない。喉がヒクヒクと動き、喃語のような呻き声のような音が出るだけだ。声の出し方を、忘れてしまったみたいだった。

「ふうん」

だがそれで、迅は男が自分の言葉を理解していると察する。

分厚い体を持つ男が、自分の下で困惑し怯えて縮こまっている。迅の興奮を掻き立てるのに十分なシチュエーションだ。

相手が活着ているかどうかは、性欲の溜まった迅には些末な問題ですらあった。むしろ、活着ている人間に無体を働けば問題になるが、死んだ人間なら誰も文句は言わないだろうと思う余裕さえあった。

「俺溜まってんだよな」

「っ……！」

迅は男のTシャツに手を伸ばし、無遠慮にまくり上げる。濡れて汚れたTシャツを剥いで見れば思っていたよりはきれいな肌が露出した。

「へえ、意外と汚れてねえな」

言ってから、ゴク、と喉が鳴る。

しっとりと水気を帯びた男の胸板は、もともとの色白さに血色の悪さが重なって真っ白だった。そこにふつくとささやかに盛り上がる胸が乗っていて、ツンと色の濃い乳首が鎮座している。

「可愛い乳首してんじゃん」

指先でつつ、と弾くと、男の胸筋がぶるるっと震えた。男は迅の行動の意味が分からないのだろう。ひく、と喉を震わせ、不安そうに目を細める。

迅が手のひらで男の胸を包み込むように撫でた。ふに、と柔らかい肉が指に沈む感触。餅のように柔らかいそれを揉み込むようにすると、男の口から「うゝ……」と掠れた声が漏れる。その反応が面白くて、さらに指先で乳輪をなぞる。

「あゝ……ツ」

そのままかりかり♡と爪先で乳首をひっかくと、男の腰が跳ねる。乳首から走る感覚に戸惑っているのか、目を見開いたまま固まっていた。

「化け物でも感じんのかおもしれえ」

迅は乳首から手を離し、自分のハーフパンツと下着をずり下ろす。ブルン、と勃起したチンポが勢いよく鎌首をもたげた。それなりモテると自負してそれなりに遊んでいる迅のチンポは、経験の少ない人間が見れば怖気づく大きさだ。黒々として亀頭が大きく、カリ首がでっぴりと張っている。久しぶりの性的興奮にビキビキと血管が浮いて大変凶悪である。

だが男は、不思議そうに瞬きを繰り返しているだけだ。どうやら、このチンポがどういう意図で晒されたのか、わかっていないらしい。

「しゃぶれよ」

「う……？」

男は、自分の口元へ押しつけられた迅のチンポに困惑しているようだった。何を言われているのかわからない、といった様子で、迅を見上げてくる。

「しゃぶれって言うてんの」

迅は男の頭を掴み、自分の股間に押しつける。抵抗することなく迅の股間に顔を寄せた男は、それでも状況が飲み込めていないようで、ただ困惑したように迅を見上げてくる。その表情にすら嗜虐心を煽られる気がした。

「口開けろ」

冷たくて柔らかい唇に先端を押し付けると、薄く開いた唇から舌が覗く。てろ、と亀頭を舐めたがそれだけだった。

「何だよやり方もわかんねえのか」

「……あ」

男の顎を掴むと、無理矢理口を開かせた。そしてそのままチンポを突っ込む。頭を抱え込んで固定し、腰を押し付けていく。上あごを撫でるように動かすと、男が嫌がるように首を振った。

「ツ……つぶあ、お`……」

「歯立てたらまた首へし折ってやるからな……ッ」

迅は男の頭を掴んだまま、好き勝手に動いた。どうせ死んでいる身体だ。呼吸などしていないだろうと思って喉奥まで突っ込む。ドタバタと足を動かしている音がするが無視だ。言われたとおりに歯を立てないようにしているところがいじらしく感じる。

男の口内は死んでいるくせにねっとりとした唾液に満ちていた。そのくせに、体温は低く、熱く勃起しているチンポを包み込む。腰を動かして咽内を穿つと、裏筋を男の柔い舌が刺激してゾクゾクと快感が走った。

「は……ッ、ん……いいぞ、使え、るなお前……ッ」

「え`お、お`え`……ッ」

喉奥へ亀頭をねじ込む。奥の狭くなったところにカリ首が引っかかり、そこを拵げるようにして何度もピストンする。男の喉からは苦しそうな音が漏れているが、そのことに構う余裕もなかった。久々の快感に腰が熱く蕩けそうになる。早くこの欲望を吐き出したい一心で腰を振った。

「っは、っあゝー……っ！！」

「っ……！？」

異物を押し出そうとしているらしい男の喉が絞まる。先端を締め付けられ、ブルっと迅の腰が震えた。じゅぶ♡じゅぼ♡と唾液と先走りの混じったモノが抜き差しの度に男の口から溢れる。

「っは、っは……っん`……」

「ん`ぶっ、っお`ご……ッ♡ん`おッ……！？」

「ははっ、喉まんこ使われて気持ちいか？」

戸惑ったような声で呻く男を見下ろしながら、迅は詰った。男の声に甘さが混じっているような気がしたからだ。ぎゅっと目を瞑ったまま、迅に頭を掴まれてされるがままの男は逃げるでもなく太もみに手を添えている。

んく、と男が口内にたまった体液を嚥下した。反射的な動きだが、ガチガチに勃起したチンポを絞り上げるような動きに射精感が高まる。喉の奥でカリ首を扱きながら、舌先を裏筋に押し付ける。

「ッ、出る……ッ」

「ん`……っ？！」

男の口の中でチンポが一層膨らむ。その瞬間、迅は男の頭を引き寄せた。そのまま、一気に射精する。

「っお、ぶ、お……♡」

「あゝー……イイ……ツ♡」

びゅるるるうう……ッ！♡と勢いよく噴き上がったザーメンを男の喉奥へ叩きつける。一滴残らず注ぎ込むように、腰を突き上げた。男は逃げることもできず、ただ迅の射精を受け止めるしかできない。苦しそうに足をばたつかせるくせに、太ももに添えられた手は力を籠めることすらしなかった。

「っはあ……、ツ」

「んっ……うゝ、く……んゝ……っ」

口内にチンポを埋めたまま余韻に浸っていると、男の喉が大きく上下する。ごく、と何度か嚥下した後、口内でゾロリ、と冷たい舌が動いた。押し出すような動きではなく、舐め取るような動きだった。次いで吸い付かれ、尿道に残った汁まで啜られて迅の考えは核心になる。

「は……、ははっ……何、お掃除フェラまでしてくれんの？」

「ん、っうッ.....っ♡」

「ッ、もう出ねえって、また勃起すんだろ離せ離せ」

じゅ♡じゅる♡となおもしゃぶりついてくる頭を引きはがし、半分ほど勃起したままのチンポを引き抜いて立ち上がった。ぢゅぽ、といやらしい音を立てて口からチンポを引き抜かれた男は、頭を床に落としてはあはあとその分厚い胸板を上下させている。

薄汚れたTシャツをまくり上げられたまま白い胸を晒して身を投げ出してる様を、迅は舐めるように見つめた。そうしてふと、男のスウェットが盛り上がっているのに気づく。

「何だよ、お前勃起してんの？」

「！？」

指摘すると、男は上半身を起こしてもたもたと後退りして迅の足の間から逃げようとする。だがそこには扉の空きっぱなしになったクローゼットがあるだけで、男はクローゼットの奥の壁に背中をぶつけて止まった。迅は膝をついてしゃがむと、男の膝に手をかけて足を開かせる。

「逃げんなよ。しゃぶってくれたお礼に抜いてやるから、な？」

「っあゝ……ッ！？」

迅は男の太ももを抱え上げた。持ち上げられた尻から濡れたスウェットと下着を剥がすように脱がせる。それと同時に、むわ……♡と濃い雄の匂いがした。男の股間はしっかりと勃起していた。それどころか、先走りが先端に滲んでいる。

色は薄いがなかなか大きなチンポだった。太さも長さもしっかりあって、やや皮の被った愛らしいチンポだ。

「お前も溜まってんのか、まあ死んだら抜くこともねえよな」

「ひっ♡」

「スケベな身体しやがってよお……」

握り込むと、ガチガチに勃起しているはずのチンポを少し冷たく感じる。だがそれは、己が興奮して体温が上がっているせいかもしれないかった。

「んっ！あゝ……おゝ……っ」

「後から後から溢れてくんじゃん。汁多い方？エロいね」

迅はニヤニヤと笑いながら、相手が化け物だとわかっていながらも  
つついせフレに言うような言葉をかける。皮を剥き降ろし、竿をゆっく  
りと撫で上げる。ヒクヒクと亀頭が揺れるのを掌で包み込み、男が見え  
るように高い位置から唾液を滴らせた。チンポの先端に落ちたそれ  
に、尿道がヒクつくのが見える。

「お`.....ツ、う`.....♡」

唾液の滑りと男のチンポから染み出したカウパーを使ってヌルヌルと  
抜き、先端を親指の腹で撫で回す。迅の手管に翻弄されて小さく呻く  
男は、自分のTシャツを両手で掴んで身悶えた。泣き出しそうな顔で俯  
いているが、その視線が自分のチンポに釘付けなのは明白だった。

それを横目で見ながら、耳元にそっと声を吹き込む。

「お前男にチンポ抜かれてこんななってんだよ」

「あ`、や`.....ツ♡」

「恥ずかしい？可愛いじゃん」

揶揄うと、青白い肌に赤みがさしたような気がした。Tシャツをたくし  
上げて自分の顔を隠す様が、幼気な子供のようにそのアンバランスさ  
にぞっとした興奮が迅の体を駆け巡る。

しゃぶってやったらどんな反応をするだろうか、と思う。けれど、薄汚れた体に口を付ける勇氣はなかった。代わりに、もう片方の手で柔らかい睾丸の下、会陰を押し込んでやる。

「どう？ここ好きな奴はこれだけで射精すんだけど」

「んっ、っおゝ……！♡」

身を強張らせた男の喉から、はっきりとした声が漏れた。どぶ♡と先端から溢れ出したカウパーが迅の言葉に答えている。

「ヨさそうだな」

「おゝおッ……♡お、ほ……ッ♡♡」

何度か押し込むたび、男は明瞭に喘いだ。快感を追いかけて腰が上がり、ヘコヘコ♡と動いて迅の手で自分のチンポを扱く動きさえして見せた。

「素直でいいねえ」

「っ、ううッ……っ♡」

会陰とチンポを責められている快感が相当強いのか、男はゆるく首を横に振った。は♡は♡と短く息をしながら、胸元でTシャツを握り締めている。

反応があることに驚いている部分はあるが、迅はそれよりも自身の欲求を優先した。戸惑いながらも確実に快楽に耽溺しているこの男を、思うままに乱してやりたかった。

片手で先端を覆うように掴むと親指でその鈴口を撫で、会陰を圧していた手で竿を思い切り扱いてやる。びゅ、ともはや射精と思うような先走りが溢れた。

「ひ、っ♡」

「イキそうなんだろう？」

ねっとりとした興奮に満ちた低い声で囁くと、男が身を縮める。

竿を扱きながら、鈴口を苛め続ける。呼吸の感覚が早くなり、ときどき堪えるように下腹に力が入る。顔が真っ赤になっている。カクカクと腰が震えて、射精寸前であることが見て取れた。

迅は男の耳朶に唇を寄せると、吐息を吹きかけるように再度囁いた。

「イケよ」

「ッ……！？お♡おおっ……ツツ！！♡♡♡」

その瞬間、男の腰が跳ね上がった。ビュルルルッ！！♡と勢いよくザーメンが噴き上がり腹に散る。びゅく♡ビュ♡と何度かに分けて射精し、それに合わせて背筋を反らして痙攣した。

射精が終わるまでずっとチンポを握って扱きつけてやると、やがてガクンと体から力が抜けて足をだらりと投げ出してしまう。

「ッ……っあゝ……♡」

肩で息をして、涙の溜まった瞳でこちらを見てくる男に、ぞくぞくとした愉悦を感じる。

「お前敏感すぎじゃね？こんな簡単によがっちゃってさ」

揶揄うと、男はくしゃりと顔を歪めた。それがなんだか愛しく思えて、もっと可愛がってやりたくなる。未だ萎える様子のないチンポを掴んで、ゆっくりと上下に扱く。びゅ♡と残滓が飛び出した。

「あゝ……ッ」

「もっとヨくなろうな」

片方の足の膝裏に腕を入れて抱え上げ、膝を立たせて広げる。ぼやとした顔でこちらを見つめる男に話しかけながら、腹の上の淫液を指で拭い取ると、肉厚な尻を反対の手で押し広げた。色の薄いアナルが、皮膚を引っ張られた刺激で慎ましく窄まっている。そこへザーメンにまみれた中指を押し当て、にゅぶ♡と問答無用で押し入れた。

「ツツ！？」

ギクンツ、と身を強張らせた男が、強く指先を締め付けてくる。だが自分が出したザーメンの滑りで迅の中指はさらに奥へ押し込まれた。

「あゝえゝ……ツ」

「ちょっとびっくりしたなあ。ごめんごめん。ほら力抜け」

「おゝ、ふ……ツ、ふ、うゝ……」

軽く太ももを叩いてあやすと、男は素直に息を吐いて力を抜こうとする。化け物のくせにチョロいなと思いながら、少し冷たい内壁を撫でる。腹側、ちょうどチンポの根本あたり、圧をかけると投げ出したままの男の足がビクと跳ねた。ザーメン塗れで力を失っていた男のチンポもピクピクと反応している。

「んいゝ、っ？」

「あ、ここ？」

「……??」

男が口を半開きにしたまま小首をかしげる。いっそあざとささえ感じるその仕草に、可愛いなと思ってしまう。

「ここな、お前がメスになるトコ♡」

「おゝ……っ？」

迅は指先で先程の場所を押し上げた。ぎゅ、と男の太ももに力が入って、指も締め付けられる。宥めるためにゆっくり指を引き抜き、男の力が抜けたところでまた指を押し込んで同じ場所を押し上げる。

「っ、お……ぐッ！？っ、おほ……ッおゝ♡おゝッ！！♡♡」

「そうそう、ゆっくり気持ちよくなろうな……」

「は、あゝ……っんいゝ……！！♡いゝ、あゝ……あゝ♡♡」

繰り返していると、内壁が蕩けていくのが分かる。指に吸い付き、指をしゃぶるように阿ってきた。前立腺を捏ねられても腰をくねらせて感じ、勃起したチンポを揺らして先走りを飛び散らせた。

「才能あるなお前」

「っおゝ.....♡.....おゝッ！？♡」

にゅぷ♡と指を二本に増やして中を探る。嫌がる様子がないので再び前立腺をトントン♡と圧すと、指が食いちぎられそうなほど締め付けられる。男の腰が浮き上がって、迅の顔のすぐ横で揺れるチンポから先走りが滴り落ちてクローゼットの床を汚した。

「なあ、自分で足持って」

「ッ.....？」

「ほらこうやって。足持ってケツ突き出してろ」

肩あたりまでクローゼットの壁にもたれている男に、膝裏を掴んで足を抱えさせる。チンポもタマも迅の指を咥え込まされたアナルも全部晒すような格好だが、男は言われるまま膝を抱えた。

「あゝ.....♡おゝ、.....♡」

ゆっくりと指を引き抜き、押し込む。チンポが入ったときと同じ動きだ。男は前立腺に触れられないことにもじもじと尻を揺すっているが、痛みはないらしい。半開きの口からダラダラと涎を垂らし、指を咥え込むアナルを見下ろしている。

「自分のケツほじられてるの見て興奮すんだ？」

「あゝ、うぐ……ッ♡うんゝ……ッ♡」

「エッチだねえ。力抜いとけよ」

「ッひ、ぐ……ッ！！♡♡」

三本目の指を押し込むと、さすがに男が顔を顰めて奥歯を噛み締める。迅が男のチンポの先端を手のひらで撫で回してやると、その快感に飛びついた男が、両足の指を丸めて呻く。その隙に、緩んだアナルの中で内壁をかき分け前立腺に触れる。

「んおゝ、おゝ……ッ！！♡♡♡」

三本そろえた指でにゅぷ♡にゅぷ♡と前立腺を押し込み、何度も刺激する。時折広げるように指を開いたりして男の胎内を蹂躪した。震える太腿を片手で撫で、男の腰が引けるのを妨害する。

「いい感じ」

「おゝ.....♡ッ♡」

指先を引き抜き、収縮するアナルを見下ろす。迅が触れるまで慎ましかったところは、少し赤みを帯びてヒクついていた。何かを咥え込むことを覚えさせられ、先を期待しているような淫靡さだった。

「お前の反応がいいから、俺もこんなだよ」

男の痴態にすっかり勃起している自分のチンポを押し付け、尻の間に擦りつける。にじゅ♡ぐじゅ♡と体液の絡む音をさせながら、挿入しているときのように大きく腰を動かした。アナルから会陰、タマを擦ってチンポ同士が擦れ合い、亀頭と亀頭がぶつかるたび溢れたカウパーが糸を引いた。

「おゝ♡、おゝ♡」

「チンポで擦られて気持ちいい？」

ガクガクと足を震わせ、男の体が仰け反る。足を掴んでいた腕が離れ、空いた方の手で股間を隠そうとするのでその手も取って膝裏に戻す。

「隠すなよ。ちゃんと持ってろ」

「ひ、おゝ……ッ！？♡♡」

「あー、挿れてえ。挿れていい？」

「んっ、うゝ……？っ、あゝ……？」

肉厚な腿裏から尻を撫でつつアナルを亀頭で軽く押しながら問いかけると、男がこちらを見上げる。きっと理解なんてしていないだろうと思いつつ、今度はわざと男の顔を見つめ返す。

「ダメつつても入れるけど」

「ん、お……？」

チンポの根元を持って体重をかける。にゅぷ……んッ♡と亀頭を飲み込んだアナルがその大きさに慄いて強く締めあげてきた。けれど指の時と同じく、ザーメンや体液でヌルついたアナルは迅の思うままチンポを受け入れてしまう。

「おごッ……おおゝ……ッ！！」

「はい、ナマそうにゆー……っ♡」

壁に押し付けられるようにして大柄な体を折りたたまれ、雄のチンポを受け入れさせられた男はブルブルと震えながらも自分の膝から手を離さない。迅は男の様子を窺いながら、徐々に奥へと腰を進めた。ずぷぷぷぷぷ……ッ♡と太いチンポがアナルを押し拵げながら入っていく。

「おゝほおゝ……ッ！！！」

「ッ、きつつう……こりゃ初モノだわ」

男が首を振って声を上げる。しかし迅の侵入は止められない。少し引いて押し込むごとに、ぬちゅ♡にゅちゅ♡と粘ついた水音をさせながらチンポを呑み込ませていく。

「貫通おめでとう……♡」

「っおゝッ、あゝ、ぐ……ッ！！」

「はは……やべえなこれ」

腹筋がピクピクと引き攣るのに合わせて、男の胎内が締め付けてくる。思わず射精してしまいそうになるのを堪えて、奥の奥まで挿入しきった。

「はあー……全部入った」

「うゝ、うゝ……ッ」

「ほら、こっち寝転んで」

チンポが根元まで挿入され、男の尻と迅の鼠径部がぴったり合わさる。男の首に腕を回し、迅と壁に挟まれていた体をクローゼットの床に寝かせた。また首が折れては萎えるので、しっかりと頭の裏を支えて、だ。好みの男とは言え、さすがに死姦の趣味はない。

「これも脱いで」

「んゝ……う」

男の胸元でぐちゃぐちゃになっているTシャツを脱がせ全裸にする。真っ白い体に、さっき弄った乳首がツンと勃起上がっていた。指の腹でかりかり♡と先端を優しく搔いてやれば、男が身を震わせてチンポを包む肉壁がざわめくように動く。

「お`.....っ♡あ`♡」

少し強く乳首を摘まむと男の逞しい体が痙攣して、抱え込んだ足のつま先に力がこもった。すぐに離してスリスリ♡と撫で擦り、くりゅくりゅ♡と捏ね回して身悶える男を堪能する。男が快感に翻弄されるのに合わせて、肉筒が少しずつ解れ蕩けて迅のチンポになじんでいく。硬いチンポを締め付ける内部からの刺激にすら、甘い痺れを感じているのも分かるようになってきた。

「気持ち良さそうだな」

「お`ッ♡お`.....ッ♡.....お`ッ♡お`ッ.....！♡」

押し付けたままの腰を、擦りつけるように動かす。奥を捏ね、アナルにチンポの太さを慣れさせる動きに、男はされるがままで甘く声を上げ続けた。にゅぷ♡にゅぷ♡と体液の混ざり合う音が鳴る。次第に、男の体が弛緩していくのが分かった。

足を開いたまま、全身の力を抜いてされるがままになっている。そろそろ馴染んできたかと腰を引くと、亀頭の段差で内壁を捲りあげられる感覚に男が背中を反らせて喘ぐ。

「お`ッ♡ぐ、う.....♡♡」

カリ首が抜ける寸前まで腰を引き、男の足首を掴んで頭の方へ押しやり尻を上向かせる。上から腰を下ろすようにしてチンポを深くまで挿入していくと、男は自分の頭を抱え込んでその快感を堪えているようだった。

「っお`お`.....！！♡♡♡」

ずちゅ♡じゅぷ♡と何度も緩慢な抽送を繰り返すと、肉壁が蕩けて柔らかな媚肉がチンポに絡みついてきた。熱く蕩けた肉筒がチンポを歓迎するようにうねり、包み込む。すっかりと、雄を咥え込む蜜壺になっていた。頭を搔きむしっていた男の手もだらりと投げ出され、腹をさらけ出して雄の侵略を受け入れるままだ。

その心地よさに夢中になって抽送を繰り返すうち、徐々に迅の余裕もなくなっていく。

「はあ、やべえなこれ.....っ♡」

「お`.....♡っあ`♡お`.....っ♡」

腰を掴み、奥を穿つ。奥に龟头が当たるたびに、男は声を上げた。きゅう♡きゅう♡とアナルが収縮して、迅の射精を促してくる。

「ツく、……ッ！！♡♡」

「おゝ……ッ♡っあゝ……！！♡♡」

大きなストロークでピストンし、媚肉でチンポを扱く。冷たかった男の体内は、今や熱く蕩けて雄を受け入れていた。奥を捏ねると背を撓ませて震え、前立腺を抉ると身を強張らせてこみ上がる快感に耐える。男の反応に呼応するようにチンポがぴくぴくと腹の上でのたうち、カウパーを溢れさせた。

「自分でチンポ扱けよ。俺お前のケツアナほじんで忙しいからさ」

「あゝ、うゝ……ッ♡うゝ♡」

「ほら」

男の手を掴んでチンポを握らせるが、ゆるゆると撫でるような動きをするだけで一向に扱こうとしない。迅も自分の快感を追う方が優先で、鼻で笑って放置した。

「お前チンポ扱くのもへたくそかよ」

「うゝゝ……♡」

「あーあ、ケツでイけるといいな」

「あゝ、あゝッ……♡♡」

にゅぷにゅぷと中を掻き回しながら、男の体に覆いかぶさる。大きな体はクローゼットの中に横たわってもまだ窮屈そうで、首筋に鼻を埋めて思い切り息を吸った。ほのかなカビ臭い匂いと腐葉土の匂い。

じわ、と下半身に熱が集まっていく。それが興奮によるものなのか、はたまた別の理由なのか、迅にはわからなかった。

「おゝ♡おゝ♡……おゝ……ッ！！♡♡」

腰を引き、ギリギリまで抜いてから奥を穿つ。ぱん♡ぱん♡と肉同士がぶつかり合う音が響く。そのたびに男の声が大きくなっていった。声帯を潰されたような濁った嬌声だが、そこに甘さと快感が混ざっているのはわかる。男の体がビクビクと震えて、腹の上のチンポが跳ねた。絶頂が近いらしい。

「あゝー出そ……ツイ、く……！！！」

ずちゅん♡と奥まで突き上げ、射精のために強く抱きしめた。ぎゅうううう♡とアナルが締めまり、奥が亀頭に吸い付いてきた。

「お`お`ッ♡♡お`ー……ッ！！♡♡♡」

「ッ……！！♡」

びゅるるうッ！！♡びゅうッ♡と勢いよく精液が吐き出され、男の最奥を濡らしていく。その熱さと量に男は体を跳ねさせ、自身も射精した。

「お`……ッ！！♡お`ッ！♡」

「はあッ、まだ……ッ全部、飲め……ッ」

何度も緩く抜き差しし、尿道に残ったザーメンまで一滴残らず注ぎ込んでいく。それに合わせてビクッ♡ビクッ♡と男の体が震え、断続的に精液を撒き散らした。男のチンポはほとんど萎えたままだったが、それでも射精を続ける。

全て出し切ってからずるりとチンポを引き抜くと、迅は体を起こして男の体を見下ろした。

「んい`……ッ♡」

「はあ`ー……やべ、気持ちよかった……」

男は足を投げ出したまま横たわっている。腹の上で自分の出したザーメンにまみれ、虚ろな目をしていた。その表情に、先ほどまでの快感の余韻がまだ残っているようだった。

「んあゝ……♡あゝ……っ」

ぐったりとしたままの男が、体をくねらせて尻を持ち上げる。肉厚な尻の奥から、ドロリ♡と迅の出したザーメンが溢れていた。どうやら、精液を排出しながらも快感を得ているらしい。迅が男のアナルに指を入れると、待ちわびていたかのようにきゅ♡と締め付けてくる。

「んいゝ……っ？♡」

「やべ、もっかい勃起してきた……っ♡」

迅は男のアナルに指を突き入れ、中の精液を掻き出していく。ぐちゃぐちゃと水音を立てて出し入れすると、それに合わせて男の腰が揺れた。前立腺を押し潰すように刺激すれば、体を震わせてチンポを勃起させ先走りを垂らし始める。

「あー、やべえなこれ。止まんねえかも……」

頭の隅に、取り込まれたのではないか、という考えが浮かぶ。けれど快感と男への性欲が、すべてを覆い隠した。自分のモノを突っ込んで種付けしてやりたい。抱きしめて全身で密着したい。汗や唾液や、自分のザーメンまみれにしてやりたい。この体の深いところに俺を刻み込んでやりたい。その欲求が強すぎて、他のことは何も考えられなかった。

## 第二話

「おら、お前も拭けよ」

ぼんやりと全裸で座り込んでる男の頭に、水を絞ったタオルを投げる。1階に下りた迅が取りに行ったものだ。長い前髪の上にかぶさるタオルを、男は手に取って折りたたんだ。そうしてのろのろと四つん這いになり、部屋の床に広がる泥を拭き始めた。

「いや体拭けて……まあいいか」

体液が乾いて気持ち悪い感覚とかはないのかと迅は思ったが、気にならないのかもしれないと思い直して自分も床を拭くことにした。全裸の男と違って、こちらはちゃんとハーフパンツとTシャツを身に着けている。

迅が男を弄んでいるうちに泥は乾いてしまったらしく、灰色になって床にこびりついていて。引っ搔いてしまえば取れるかもしれないが、万が一にでも床に傷をつけて兄に怒られることを思えばそれもできなかった。

「お前名前なんて言うの？」

「あゝ、う……おゝ」

「ここに住んでんの？ やっぱ死んでんの？」

「ううゝ……あゝ」

言ってることは理解してそうだが、呻くしかできないらしい。弄り回していたときの方がよほどわかりやすかったななどと思いながら、あらかた綺麗になった部屋を見て廊下に移動する。ペタペタと同じようについてきた男も、また廊下を拭き始めた。歩いてももう泥の足跡はつかないようだった。

「泥は服についてただけか……？」

湧いて出ていたように見えたが、実は服が汚れていただけだったのか。

四つん這いで床を拭く男の尻と股の間で揺れるチンポを後ろからちらちら眺めながら、迅は階段の方を拭っていく。踊り場まで泥を拭き去ると、階段の上から男がこちらを見下ろしていた。

「何だよ。あ、お前あの汚え服捨てるから持ってこい。俺の貸してやるから。あと風呂入れお前」

なんか臭えし、と言いかけて、そんな男のケツにチンポを突っ込んだのも思い出して自分も風呂に入りなおそうと考える。男は無言で部屋に戻り、服を抱えて戻ってきた。やはり、言ってることは理解しているらしい。

「湯船に湯貯めてやるから温まれよ」

階段を下りて風呂場へ行き、お湯張りのボタンを押す。ついてきていると思って振り返ったが、そこには誰もいなかった。もしかして消えたのかと思いつつ階段まで戻ると、男は踊り場で立ち尽くしていた。服を胸の前で握り締め、あうあうと狼狽えている。

「何だよ、階段降りられないわけじゃないだろ？」

怯えたような顔で、男は踊り場からこちらを見下ろしている。よく見れば、目元から真っ赤な血の涙が流れていた。

「何、泣いてんの？」

何なんだと思いながら階段を上がっていくと、男の手首を掴む。引っ張ると、男は嫌だというように腰を引いて抵抗した。

「降りるの怖いって？ガキでもねえのに？まあいいや、んじゃ俺が手え引っ張ってやるから目瞑って降りりゃいいだろ」

「あゝ……」

「はいはい、目隠しプレイ目隠しプレイ。はい右足で一段目降りるー」

男が手に持っていた服を頭にかぶせ、両手首を掴む。そのまま問答無用で指示すれば、男は恐る恐る足を踏み出した。そろおり、と降ろされる右足にしっかり体重が乗ったことを確認し、迅は次の指示を出す。

「はい左足出してー、もう一段降りるー」

「おゝ……、あゝゝ……」

「大丈夫大丈夫。俺がちゃんと手え持ってやってんだろ」

ゆっくりと、一段ずつ、たった五段しかない階段を男は時間をかけて降りた。面倒だなと思いつつも、消えたり現れたりができなさそうな感じなので仕方ない。全裸のまま二階をうろうろされても困る。

とん、と最後の段から降りた男の頭から薄汚れた服をはぎ取り、玄関の方へ放り投げる。あとでまとめてゴミ袋に突っ込むつもりだった。

「ほら行くぞ」

片方の手首は握ったまま、廊下の奥の風呂場へ向かう。黙ってついてくる男は、一階にはあまり降りてきていないのかきょろきょろと周りを見渡していた。

「ほら入って座れ、椅子ねえけど」

湯気の充満する風呂場の扉を開けると、男は言われたとおりシャワーの前で座り込んだ。

とりあえず自分の服を貸してやればいいだろうと考えながら自分も服を脱ぎ、浴室に入る。さすがに湯になる前の水をぶっかけるわけにもいかず、手に持ったシャワーから出る水が温度を上げるまで待った。

「お湯かけるぞ、熱かったら言えよ」

言えるわけないと思いながら頭のとっぺんから湯をかける。膝を抱えてうつむいたままじっとしている男の長い髪に湯が染み込み、体を伝い、浴室の床に流れる頃にはうっすら茶色になっていた。

「うえ……お前風呂、まあ、そりゃそうか」

幽霊だか怪異だか知らないが、生きていない人間なら風呂には入らないだろう。そうでなくとも、迅が来るまでこの家は水道もガスも止まっていたのだ。

「あーあなんか変な奴拾っちゃった気がすんなあ」

男の頭にシャンプーをぶっかける。自分はいつも1プッシュだが、男の髪の長さや汚れ具合に適当に5、6プッシュしておく。生まれてこの方、人の頭など洗ったことはないの、見よう見まねでわしゃわしゃと髪を掻き回した。全く泡立たないが。

「お痒いところはございませんかあ、とお」

前髪の生え際、耳の上、うなじ、頭頂部。洗い残しがないように指の腹で揉みながら擦る。割と上手く洗えてるんじゃないかと思えば機嫌も上向いて、様式美をなぞって声をかけた。やはり返事はないが、ぐす、と鼻をすする音がして思わず覗き込んだ。

「何泣いてんのお前。泣いてんのかそれ、血だよな？流すぞ」

両目から血の涙を流している男は、目を瞑ったままぐずぐず言っている。訳を聞くにも喋れないわけだし、尻が痛いとかじゃなさそうなので迅は構うことなくシャワーで泡立たないシャンプーを洗い流した。

「もっかいシャンプーな」

今度は3プッシュだ。さっきよりは簡単に泡立ち、泡の色も真っ白であることに安堵する。まさかずっと薄汚れたままではないかと心配していたがちゃんと綺麗になるらしい。

「やっぱ風呂って大事だよな」

聞いているのか聞いていないのか、男は黙ったままだ。しかしシャンプーを流すと頭を左右に振って雫を飛ばすので、なんとなく不思議な生き物を相手にしているような気がしてきた。今さらである。コンディショナーなどないが、リンスインシャンプーだから大丈夫だろうと自分を納得させた。

「次は体な」

「あゝ」

自分の使っているかためのナイロンタオルをちらりと見て、男の生気のない肌を見下ろす。何となく、ズタズタになりそうな気がして、風呂場の外から取ってきた普通のタオルをぬるま湯で濡らしてボディソールを泡立てた。

「お背中流しまあす」

何をやってんだ俺はと思わないではない。これまで迅が関係を持ってきた相手と、こんな介護みたいに風呂に入ったことはなかった。セックスする相手との風呂は、刺激的でエロチックなアミューズメントだった。

それでも茶色い泡まみれになる自分の手と、その手が持ったタオルと男の背中を眺めながら、なぜか悪い気はしなかった。偏に、男の背中が広くがっしりとしていて、迅の好みだからだろうと思う。

「やあっぱ汚えの。はい、膝立ちになって」

右腕を掴んで指の先まで洗い、泡立ちが悪くなったので一旦タオルを濯いでもう一度ボディソープを足す。十分に泡立ててから左腕を指先まで洗い、言われるまま膝立ちになった男の脇から前に手を回して

胸を撫でた。むっちりもちもちとした感触を楽しみながらタオルと素手を使って洗い、ときどき手のひらに引っかかる乳首をわざと弾く。

「うゝ……♡」

「あれえ？お前なんでまた勃ってんの？」

どっしりとした腰回りも洗い、股座に手を突っ込む。陰毛を泡で包むように洗い、ゆるく勃起しているチンポも掴んで撫で、皮を剥き降ろして丁寧に洗っていく。その間に耳元に声を吹き込んで擲揄うと、男は肩を竦めて逃げようと壁に縋り付いた。そうすると、迅の方に男の尻が押し付けられることになる。ぬる、と尻でチンポを擦られ、込み上がる興奮に口元がにやけた。

「尻も足も洗うんだから股開け」

男の足の間に膝を押し込んで開かせ、金玉も会陰も尻の穴も指先で撫で洗いする。ヒクつくアナルに指を突っ込んでやりたかったが我慢して、どこよりも汚れていた両脚の泥を流し、足の裏から指の間まで擦った。

「流すぞ」

シャワーで色のついた泡を全部流し、タオルは浴室の隅に放り投げる。乱暴に何度かブッシュして手のひらいっぱいボディソープを押し出して男の広い背中にぶちまける。両手で撫でると、今度はすぐに白い泡が立ち始めた。

「あゝ……ツ♡うゝ、あゝ……♡」

むっちりとした背中から肩甲骨のくぼみ、腰回りを手のひらで擦る。肌は冷たいが、筋肉の盛り上がりはしっかりとしていた。特に広背筋が目立つ、ジムで鍛えたものではなく実用性がある筋肉だなと思いつつ脇腹まで手を滑らせると、男の体が大きく跳ねた。

「お前脇腹弱いの？」

「あゝ、あゝ……ツ！？♡」

脇腹を撫でられただけで体を震わせる男に面白くなってきて、両側から脇腹を擦った。

「ほおら、こちょこちょこちょ～～」

「あゝ、うゝ……ツ！？♡うゝ……ツ♡♡」

身を振って逃れようとする男を、後ろから抱き締めて押さえ込む。その間も手を休めずに擦り続け、泡を引き延ばすように両手で胸を撫で回した。乳首を両手で摘まみ、ヌルん♡と滑らせれば男の体が前屈みになって強張る。

「お`.....ッ！？♡お`ッ♡」

「洗ってやってんだから、じっとしてろよ」

そう言いながら、迅は後ろから男の尻の間にチンポを押し付けて擦る。行ったことはないがソープランドのプレイってこんな感じかなと思いながら、身悶える男の体を撫で洗いし続けた。

「お`ッ♡、お`.....♡」

「よおし、流すぞ」

迅が再びシャワーを手に取ったとき、男はすっかり膝立ちを忘れてへたり込んでしまっていた。それでも壁に縋り付いて、なんとか身を支えている。丁寧に泡を流してやり、足の先まで泥の残っているところは無くなった。腐葉土の匂いもしなくなり、残ったのはこちらに向かってケツを突き出すエロい男だけだ。

「ナカ出ししたから、ケツん中も洗ってやろうな」

「ひ……っあゝ……！？」

処理が必要だと思っているわけでも、処理してやろうという親切心からでもない。単に弄りたいだけだ。

迅が男の尻肉を割り開くと、小さく悲鳴を上げてこちらを振り向いた。そのまま横にずれて逃げようとしたところを捕まえて、舐め濡らした中指をアナルに突っ込む。

「っおゝ……♡おゝッ！♡」

ぬちゅ♡にゆち♡と腸壁を擦って掻き出すように動かせば、男の口から甘い声が漏れた。指先にザーメンがまとわりつき、ヒクつくアナルからもドロリと溢れた。

「うー……♡おゝ……♡おゝ……っ♡」

「ナカまでキレイにしようなあ」

言いながら指を二本に増やし、アナルの縁を広げるようにしてピストンする。ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡と音が響き、男の腰が揺れる。だが逃がしてやるものかと前立腺を押し込んだ。

「おっ！！♡」

ぐりゅぐりゅ♡と指で捏ね回せば、男の背中が弓なりに反り返った。腰がガクガクと震え、先走りが糸を引いて床に落ちる。

正座するようにへたり込み、指で尻穴をほじられてザーメンを垂れ流して快感に身悶える大男の様子は迅の興奮をことさらに煽った。こちらに突き出されているむっちりした尻肉を揉みながら、腰を上げさせる。

「このまんま洗おうな？ ケツ上げろ」

「おっ♡♡.....っ！？♡」

言われるがまま尻を上げた男が四つん這いになる。くぱっ♡とアナルに咥えさせている指を開き、シャワーの湯を押し当てた。少ししてから指を引き抜くと、すぐに白濁した湯がひり出される。もう一度だけ繰り返して、尻を上げていられずにへたり込んだ男の腰を掴んだ。

「なあ、もっかい入れていい？」

「あゝ……？うゝおゝ♡」

もっちりとした尻を揉みながら、ズリ♡ズリ♡と勃起したチンポを男の尾てい骨の辺りに擦りつける。ただでさえ男が自分の手でされるがままに善がっているようで興奮していたので、弾力のある尻に擦り付けられた迅のチンポはすぐにフル勃起した。

片方の尻たぶを掴んで横に引っ張ると、男のアナルがヒク♡ヒク♡とチンポ乞いしているのが見える。

「なあ」

「っ、うゝ……？♡」

「チンポ気持ち良かっただろ？なあ、いいよな？」

答えられないとわかっていても、迅は男の耳元で囁き続けた。そうして、返事を待たずに、ぐぷ♡と亀頭をアナルに押し込む。一気に押し入りたくなるのを我慢して、にゅぷにゅぷ♡とカリだけを抜き差しする。

男の腰が震え、呻きながら浴室の床に額を押し付けている。感覚の強い括約筋だけを嬲られて身を振っているが、それでも構わずに迅は腰を前後させ、浅く出入りを繰り返した。

「うゝ♡……んゝうゝうゝ……♡♡」

「あゝ、気持ちいい……っ」

「んおッ！？♡」

男の体がぶるぶる震え始める。浅い快感にも関わらず、男のチンポからはだらだらとカウパーが溢れていた。時折大きく跳ね、体全体が痙攣し始めている。

「奥まで挿れてほしい？」

迅のチンポを美味そうにしゃぶり、きゅむ♡きゅむ♡と締め付ける肉輪が媚びている。もっと深くへ沈めてほしいと催促されているようで、男の尻を撫でて褒めてやった。

「奥、までいくぞ……ッ♡」

「ひっ♡おゝ……おッ！！♡♡」

ズチュンッ♡と奥まで一気に突き入れる。肉壁を押し退けながら亀頭が最奥に届くと、男の背中が大きく仰け反った。その拍子に体が前のめりになり、尻だけを高く掲げた状態で全身を硬直させる。同時に、男のチンポが震え、勢いよく白濁を噴き出した。

「うゝ……ッ！！♡♡」

「お、トコロテン♡俺のチンポ気持ちいいんだ？」

わずかに、男が頷くような動きを見せた。単に折れた首が揺れただけかもしれない。それでも、明確な反応があったと反射的に思った迅はぞっとするような興奮に舌なめずりした。

「おゝ、おゝ～……ッ♡♡おゝ……♡♡」

「はあゝ……ッやべえ、最高だなお前……っ♡」

さほどピストンもしていないのにトコロテンアクメをキめて耽溺している男の震える尻を掴み、ゆっくりと揉みしだく。抜けるギリギリまで引き抜くと、きゅ♡と締め付けたアナルが引き留めるように吸い付いてきた。

「おゝ……ッ！？♡♡」

「お前の好きなとこ引っ搔いてやろうな」

角度を変え、チンポを押し入れる。ごりゅ♡と前立腺を亀頭で抉られ、男が引き攣ったような声を上げた。

「っぎ、いゝ……ッ！！♡♡」

「ここ好きだろ？なあ、ほら」

立て続けに前立腺を当て掘りし、その度に男が甘さを含んだ呻きを零す。不随意に痙攣して締め付ける肉筒にチンポの根元まで挿入して奥を拡げ、濃厚な愛撫を堪能した。

「あゝ……スゲー気持ちいい……」

「っ、うゝ……♡♡♡♡」

「お前のケツ、めっちゃイイわ」

床に突っ伏したままの男の尻を揉み、厚みのある腰を撫で回して広い背中に手を這わせる。汚れを落とし、湯を浴びたせいかうっすらと血色が戻っている肌だが、性欲に突き動かされている迅の熱い手には冷たく感じた。

「引き抜くときに吸い付いてくんのもたまんねえし、」

「あゝ、……ッ♡」

「奥まで突っ込んだときの締め付けもイイし」

「おゝ♡ッおゝおゝ……ッ♡♡」

言いながら、男にも実感させるため殊更にゆっくり引き抜き、抜けていくチンポに追い継るアナルが濃い肉色を覗かせながら収縮するのを見下ろす。再び奥まで咥え込ませていくと、肉壺がチンポを絞り上げて歓待し蠕動しながら呑み込む。

「お前に取り憑かれてんだとしてもまあいいかなって思うぐらいにはすげえ気持ちいいわ♡」

「おゝ……ッ♡おゝほおゝ……ッ！！♡♡」

じっくりと味わうように前立腺を捏ねながら、奥へと突き入れていく。奥まで辿り着けば引き抜いて、また前立腺を引っ搔いてから奥まで押し込む。その度に男は声を上げて悶えた。まともに声を出せないのが惜しいと思う。

「おゝッ♡……ッ♡♡おゝー……ッ♡」

何度目かのストロークで、男が床に縋り付いたまま全身を跳ねさせる。その拍子にチンポが抜け、空っぽになったアナルがきゅ♡と窄まる。

迅が腹につくほどそそり立ったチンポを握りながら尻から一歩引くと、男がゆるりと振り返った。それが男の方も期待しているのだと思わせて、迅の興奮を煽った。

「こっち向いて」

肩を掴んで男を振り向かせ、体勢を変えさせる。横向きに仰臥させられた男は、床に肘をついて上体を起こしこちらを見つめている。逃げる様子もなく、襲い掛かってくる様子もない男の右足を跨いで左足を肩に抱え上げると、アナルにチンポを押し付けた。ちゅぷ♡と吸い付くようにヒクついたアナルを、亀頭が押し拡げていく。

「お`お`.....っ♡」

「さっきより奥まで入るぞ.....ッ♡」

狭い肉路を拡げながら挿入していくと、男は堪らないとばかりに眉根を寄せながら首を反らした。首の左側面に裂けた傷跡が見えて、迅は視線を男の体へとずらす。

「お`.....ッ♡♡お`ッ♡」

男の太ももを片腕で自分の方へ引き寄せて腰をみっちりとしつけ、チンポで奥まで貫く。体位のせいで先程より深くを抉り、男が目を見開いて喘いだ。ガチガチに勃起した男のチンポが二人の間に揺れている。溢れるカウパーが床を濡らし、先端が腹に付くほどの勃起度合いだ。

「お`お`.....ッ！！♡♡」

太いチンポでぬるぬると柔らかい肉壁を擦りあげながら、迅は男の太ももに頬を寄せる。男の腰をさらに引き上げ、密着するように抱き寄せた。ごりゅ♡と亀頭が腸壁の最奥に当たり、男が全身を強張らせてチンポから先走りを噴き出したが、迅はそのまま奥だけを突く小刻みなピストンを開始した。

「お`ッ！！♡♡う`ッ♡お`ッ♡♡」

「あ`～.....最高♡」

ごちゅ♡ごちゅ♡と奥を穿たれ、男の体がのたうつ。抱え込んだ太ももの張りのある弾力を撫でながら、反対の手で男のチンポを握り込んで扱く。新たな刺激にぎゅ♡と窄まった媚肉でチンポを扱きながら、親指で男の亀頭を翳る。

「お`ッ♡お`ッ♡.....ッ！？♡♡」

迅の汗が男の腹に落ち、それを追うように男のチンポが震えて濃い先走りが溢れる。くぱくぱ♡と尿道口をヒクつかせるのを指の腹で感じて、迅は竿を掴んで扱いた。先走りを絡めながら擦られ、男が体を引き攣らせる。跨いだ右足がつま先までピンッ♡と伸び切り、ブルブルと震えた。

「あ`.....！？♡お`.....お`♡♡」

「ほら、出しちまえ♡」

迅が優しく囁き、男のチンポを扱く手を止めないまま自分の腰を擦りつけて奥を捏ねる。性器への直接的な快楽と肉褌を雄に蹂躪される快感に、男が追い詰められるように腰を突き出した。びくっ♡と一瞬大きく体が跳ねて全身に力が入りその筋肉の隆起に迅が見惚れた次の瞬間、男のチンポから勢いよく精液が噴き出した。

「お`ッ！！♡お`お`ッ♡♡」

どぷっ♡どぴゅ♡と白濁を吐き出す男のチンポが震え、尿道を駆け上る快感に耐えるように背中を丸めながらも腰を迅に押し付けてくる。男がザーメンを噴き出すのに合わせて肉壁が収縮しチンポを絞り上げる。出した分は注いでほしいと言わんばかりの仕草に煽られて、迅は男の足を抱え直してピストンを強めた。

「お`う`ッ♡お`ッ♡♡お`ん`ッ♡♡」

ただ媚肉でチンポを擦り上げ射精を目指す単調で乱暴なピストンだが、射精直後の男には過ぎた刺激なのか体を痙攣させ足先を震わせた。

「お`ッ！♡お`お`ッ！！♡♡」

絶頂に達した直後の敏感な体を容赦なく責め立てられ、男は断続的に体を跳ねさせながら床に縋り付いている。それでも抗えない快感にチンポを勃起させたまま迅に揺さぶられ、激しい律動に翻弄される。ぎゅうぎゅうと締め付ける媚肉が迅のチンポを食い干切らんばかりに絡みついて、カリ首の段差で引っかかった肉襞が捲れ上がっては呑み込まれた。

「お前の中に出してやるからな……ッ♡」

男の太ももを抱え込んだまま、最奥まで一気に押し入る。男の体が大きく仰け反ったが、迅は問答無用で腰を動かし続けた。ばちゅん♡  
ばちゅん♡と叩きつけるような強さのピストンに、男の肉筒は健気に悦んでチンポを愛撫する。

「お`……♡お`……♡」

「ッ、出る……ッ！！♡ッう`……♡」

「お`、おッ！？♡♡お`……～～ッ！！♡♡」

射精欲を煽る動きに従って、迅は男の胎内で思い切りザーメンをぶちまけた。びゅるるうう♡♡と一度目と遜色ない勢いと量でザーメンを吐き出す。突き抜けるような快感と腰を蕩かすような甘い余韻に、思わず喘ぎそうになって奥歯を噛み締めた。それほどまでに気持ち良い射精だった。

「っはあ`……っ！♡は一……」

「お`……♡お`……♡」

ゆるく抜き差しを重ねてすべて吐き出すうちにも、男の肉褰がチンポをしゃぶる。男は呆けたようにぐったりと浴室の床に体を投げ出しているが、胎内はチンポに阿るように媚びていた。

「っ、うゝ……♡おゝ、おゝ……」

「全部搾り取ろうってすげえ動いてんな……エロいケツ……♡」

じんわりと全身に広がる多幸福感と倦怠感。ずるん♡と男からチンポを引き抜くと、法悦の名残にヒクヒクと慄く尻を眺めながら迅は体を洗いなおすためシャワーヘッドを手に取った。

「やっべ……コレ癖んなるわ」

でかい男とみっちり浴槽に入るのも悪くない。迅はそう思いながら、自分が洗い上げた男の髪の毛を両手で後ろに撫でつけてやっていた。リフォーム済の風呂は割と広めだが、それでも一般家庭のため二

人で入ると狭い。膝を抱えて座り込む男と向かい合わせに座り、迅は開いた足の間に男を挟み込んでいる。

迅の手によって長い髪が後ろにまとめられ、普段隠れているだろう首の傷がよく見える。傷口は裂けたようにズタズタだ、折れた骨が突き出たか何かしたんだろう。血は流れていないし首が正しい位置にあるので傷の中が見えるほど開いてもいないが、痛々しいそれに迅は無意識に顔を顰めていた。

性的に人を弄り回して泣かせたり虐めたりするのは大好きだが、セックスでの流血沙汰は好みじゃない。乱暴に扱ったり痛みを与えるのは相手が悦ぶなら率先してやるが、怪我をさせるのは本意ではない。あくまで、快感のスパイスとしてのプレイだ。

「うゝ……？」

「あー……ごめん。痛いかな？」

手を伸ばして首のあたりを撫でていると、男が首を傾げた。生暖かい風呂の湯に浸かっているにも関わらず、男の肌は冷たいままだ。指先を掴まれ、ゆるく握られた。大きな手のひらが迅の手を包み、体温を奪うように感じる。人間ではないという事実を、改めて実感した。

さっきまで性欲に茹っていた頭では気にも留めなかったが、目の前の男はおそらく死んでいて巷では幽霊だか怪異だか言われている存

在のはずだ。首の傷がある辺り、首折れ男の話に出てくる男で間違いないだろう。

迅は考え込むように男を見つめ、やがてゆっくりと息を吐き出す。そうして目の前にある顔をじっくり観察した。

「お前さ、名前は？」

返事があるとは期待せず、何となく問いかける。

半開きの唇は真っ青だが形は良く、上品に見える。目元はゆるく垂れていて、睫毛は濃く長く影を落としている。頬は痩けているものの、形自体は整っていた。その目が、きょとんと迅を見つめ返している。

「あ、うみ`.....お、.....う`」

唇が動いて、名前を呟いた、ように見えた。

「何て？」

「は、あ、しゅう`み、つおうい.....ぢ」

「はすみ？おう.....、いち.....、コウイチ？」

迅が何とか聞き取って名前を予測すると、コウイチは小さく頷いた。  
初めて意味のある言葉を聞いた迅は驚いたが、コウイチは首を傾げて  
迅を見返している。

「コウイチね。俺は迅」

「いんゝ……」

「じん」

「じ、いんゝ……」

「そう」

膝に手を置いたまま、コウイチは迅の名前を繰り返し呟いていた。風呂  
の浴槽の幅にみっちりと嵌る大きな体格なのに、肩を竦めて妙にこ  
ぢんまりとしている。

ふと、最初に遭遇したときよりもしっかりとした反応をするようになったことに気が付く。クローゼットの前にコウイチが姿を現してから、迅は  
幾度となく問いかけてきた。男に答える気がなかったと言われればそ  
れまでだが、最初は迅の言葉さえ理解していないようだった。それが  
今は、迅の言葉に耳を傾け、答えようとする。

「お前、成長してんの？ いや、成長とは違うのか……？」

「うゝ？」

迅が首を傾げると、コウイチも同じように首を傾げた。きょとんと開かれた目は、黒目が白く濁っている。最初は白目だった。白い濁りも、薄くなって黒色が濃くなっている気もする。死体の目をよく観察したことになってないから、そういうものなのかもしれないが。

「あー……まあ、どうでもいいかあ」

性欲の落ち着いた体と暖かい湯で逆上せた頭は、あまりうまく回ってくれない。本格的に逆上せる前にと立ち上がり、ボケッとこちらを見上げてくるコウイチを見下ろす。

「とりあえず上がるか。お前は温まんねえみたいだし」

「あゝ、う……？」

浴室から出てバスタオルを渡すと、のろのろした動きではあるが今度はちゃんと自分の体を拭き始める。迅も別のバスタオルで自分の体を拭き、服を身に着けて寝室代わりにしているリビングへ向かった。

「服貸してやるから」

そう言えばコウイチは迅の後を黙ってついてくる。

幽霊って風邪ひくんだろうか、などと思いつつリビングのカラーボックスへ向かう。畳んで積み上げている服の中で、部屋着のスウェットとTシャツを引っ張り出した。

「ほら」

「あ……」

小さく頭を下げるような仕草をして、コウイチは服を受け取る。生前はずいぶん律儀な人物だったのだろうか。こちらに背を向けて、Tシャツを広げて腕を袖に通している。布団に寝転びもそもそと服を着る様子を眺めていると、男がTシャツの裾を引き下ろした。

「……ぱっつぱっ」

迅だってそこまで華奢ではないのだが、オーバーサイズの服を好まないためサイズに余裕がない。大柄のコウイチにはどうしたって小さく、ぴったりと体のラインが分かるような着こなしになってしまっていた。幸い、スウェットの方は少し緩めだったおかげでコウイチにはジャストサイズになっている。

ムチムチの胸筋もどっしりした腰回りも薄い布一枚まとっただけで陰影が強調され、露骨に凹凸が分かる。さっきまで全裸だったのに、これはこれでエロいなと迅は思う。じっと見つめる迅の視線から、どこことなく恥ずかしそうにTシャツの裾を引っ張っているのも良い。

「まあ……しばらくはそれでいんじゃね」

「……………」

「風邪引くかは知らんけど、俺が落ち着かねえし」

あの薄汚れた服をもう一度着られて部屋が汚れるのも嫌だし、かと言って全裸でうろつかれたら新しい都市伝説が発生してしまう。しばらくはそのピチピチTシャツで我慢してもらうしかない。わざわざ買いに出かけるつもりはない。

体に馴染んだ布団に寝転がっていると、何となく眠気が襲ってきて迅は目を閉じる。吸い込まれるように眠りに落ちていくのが、心地よかった。

## 第三話

「はすみ、こういち……」

次の日の昼頃、迅は布団の上につぶせに寝転びながらスマホを弄っていた。

この家に人が居つかないの原因は、ほぼ100%、コウイチが出るからだろう。ならば、コウイチがここに住み憑くことになった原因があるはずだ。

それを調べる気になったのは、単なる好奇心だった。ただ、何となく。

迅はこれまで霊感などなく、幽霊と遭遇したことはなかった。もちろん、除霊の仕方なんかもまったく分からない。塩振ったときいいんじゃないの？程度だ。

ちなみにコウイチは、昨日迅が遅い昼寝から起きたら消えていた。貸した服もだ。自宅内をぐるっと回ってみたが、二階のクローゼットにもコウイチの姿はなかった。消えたりできんのかよ、と思いながらも風呂場のタオルも玄関の薄汚れた服もそのままだったので、まとめてゴミ袋に突っ込んで玄関の前に出しておいた。

はすみ、こういち。スマホでコウイチの名前を打ち込む。漢字は分からないのでひらがなだが、昨今の検索システムは優秀だ。AIがすぐに蓮見恒一であると予測を立てて、検索結果を表示してくれた。

「蓮見……恒一」

事件は今から25年前、中年の夫婦が山中で撲殺体で見つかり、引きこもりだった26歳の長男が自宅で死体で発見された。警察は自宅の荒れようから、長男が両親である夫婦を殺害して山中に遺棄したと断定し、被疑者死亡のまま書類送検したという。

その死んだ長男の名前が、蓮見恒一。自宅の場所は番地までは公開していないが、迅の住むこの家のある市町村と同じだった。十中八九、この家で間違いないだろう。

「引きこもりの長男……」

男、恒一は大学受験に失敗し、高卒で地元の工場で働き始めたが23歳の時に退職。その後は3年ほど自宅に引きこもっていたらしい。家庭内暴力の末の殺害ではないかという、警察の見解も記載されていた。

「家庭内暴力、ねえ……」

そんな風には全く思えなかったが、死ぬと性格は変わるのだろうか。  
それとも、家族にだけその攻撃性が露わになるのか。

思い返すと、恒一は迅に攻撃的な態度を見せることは一切なかった。ただぼんやりと立っていただけだ。むしろ、迅の方が先手必勝で恒一の腹をバットで小突いて押し倒した。だがその後も攻撃はもちろん、強い抵抗すらしてこなかった。戸惑ったような反応はあったが、されるがままだったように思う。

「まあ事故物件ではあるのか」

少なくとも、確実に恒一はこの家で死んでいるらしい。死体はしばらく放置され、警察が発見したようだ。

ぞく、と急に首の後ろが冷たくなって、嫌な雰囲気とする。音もなく、明かりが消えてリビングが真っ暗になった。テレビと、スマホだけが明るい。

「……なあ、これ……」

スマホの画面を見せながら振り返ると、すぐそばに男が立ち尽くしていた。暗い部屋に佇む大柄なそれは、恒一だ。テレビに照らされているTシャツの柄に見覚えがありすぎる。俯いた顔は長い髪に覆われているが、床に寝そべって見上げている迅からはうっすらと男の顔の辺りが見えた。

「これお前か？」

恒一はグズグズと泣き出した。両手で顔を覆って、咽び泣いている。指の間から血が溢れて流れていた。

その涙が、両親を殺した後悔の涙なのか、それとも死んだ自分に対するものなのか、迅にはわからない。わからないけれど、暴力をふるうような攻撃的な性格にはやはり思えなかった。

「まあ、ほら、人生色々あるしな」

起き上がって恒一の冷たい手を引くと、崩れるように膝をつく。体つきの割に大きな音が全くしないのは、やはり恒一が生きている人間ではないのだろうと思わせた。

「俺もさ、お前と同じ無職だし、引きこもってるみたいなもんだし」

「うう……ッ」

「そんな落ち込むなって、な？」

肩に腕を回して、ポンポンと二の腕を叩いてやる。ティッシュを引き寄せて手の血を拭ってやれば、恐る恐る顔から手を離した恒一が案の定血まみれの顔でこちらを見る。

「あーあ、真っ赤じゃん。ほら、拭けよ」

迅の懸念はその血が床に垂れてシミが残ることだ。二階はともかく、一階はリフォーム済なので汚すと確実に兄に怒られる。男の着ていた服の泥が残っていたことを思い出せば、その血もまた普通に部屋を汚すと考えた。

「泣くな泣くな」

「んぶ……っう」

ごしごしと雑な手つきで血を拭ってやり、しょげた顔をする恒一を覗き込む。眉尻を下げて、目が少し潤んでいる。癖なのか、ぎゅう、と大きな手でTシャツの胸元を握り締めているせいで、裾の方から腹がチラ見えしている。

その半開きの口元に、迅は自分の唇を押し当てた。何が起きたのか理解できていない恒一の唇を舌で舐め、口の中に忍び込ませる。風呂に入れてやったせいか、カビ臭さも腐葉土の匂いも消えていた。微かに血の匂いがするだけだった。

「うゝ……、？んうゝ……♡」

「忘れちゃえばいいよ。嫌なことなんか」

驚いたのか、恒一の大きな手が肩を掴んで押し返してくる。素直に唇を離してやって言うと、布の張り付く胸元に指を這わせた。

「気持ちイイことしてる間は忘れられるだろ？」

「ッんゝ……♡」

ここだろうと見当をつけた場所を人差し指の腹ですりすり♡と擦れば、恒一がきゅっと唇を噛み締める。刺激されてツン♡と勃起する乳首が、布の下から迅の指先を押し返してきた。

「おゝ……♡」

そのままくりくり♡こりこり♡と小さな尖りを弄ぶ。肩を掴んだままの恒一の手が力が込められることがないのをいいことに、迅は身を屈めてTシャツの上から乳首に吸い付いた。

「うゝ……、ツん、あゝッ！？♡」

唾液に塗れた舌で勃起乳首をぬるんッ♡と弾く。反対側の乳首も布の上から探り当てて摘まむと、恒一は迅の肩を掴んでいた手で口元を覆った。

「んゝんゝッ……！♡」

迅の手で乳首を捏ねられ、口に含んだ乳首には歯を立てられて堪え切れなかった声が漏れる。それは昨日よりも随分と明瞭で、甘さの溶け込んだ声だった。

「あゝ……ッ♡ッ！？♡♡」

「そうそう、そうやって気持ち良くて泣く方がいいだろ。なあ？」

「ッ、あゝッ！♡」

「乳首気持ちイイもんなあ？」

ビクビクと震える体を抱き込みながら、迅はそのままスウェット越しに恒一の股間を撫でる。すでに芯を持ち始めたチンポを手のひらで包み込んで緩やかに揉み込み、親指で布を押し上げた頂点を撫で回した。

「うゝ、あゝ♡あゝ.....ッ！♡」

「気持ちよくて腰浮いちゃうよな？わかるわかる」

「あゝ♡.....ッ！♡♡」

迅の言葉通り、恒一は胸元を突き出すようにして背を反らしている。そのせいで迅の手のひらにちんぽを押し付けることになっているのだが、本人はそれに気づいていないようだ。むしろ無意識のうちに腰を押し付けている。

「あゝ.....ッ♡あゝうゝ.....ッ！？♡」

「前より声出るようになってんじゃん」

良かったな、などと思ってもないようなことを言いながら、恒一の体を布団の上に押し倒した。パツパツのTシャツをまくり上げ、胸板まで露わにする。日に焼けていない白い肌は、昨日見たときよりも血色がいい。土気色ののっぺりとしていた昨日に比べて、何となく水っぽい透明

感と血の通った赤みがあった。自分より少し冷たい体温のむっちりとした胸筋を揉み、硬くしこった乳首を指で転がす。

「は、うゝ……うゝあゝ♡あゝ♡」

「モロ感だし、その内乳首でイケんじゃね？」

迅がそう言いながら、身を屈めて乳首に顔を近づける様子を恒一がじっと見下ろしている。昨日から、恒一は抵抗もせず自分から積極的に動くこともないが、迅に好き勝手弄ばれる様をじっと見つめていた。どんな風に責められているのかを見て、興奮しているのだろうか。表情から察することは難しかった。

「あゝ！♡あゝうゝ……ッ！♡」

舌を出し、あえて見せつけるように直接乳首を舐る。恒一はそれに釘付けになり、ごく、と喉を鳴らした。迅の肩に添えられていた手が離れ、首元までめくられたTシャツを握り締める。

「あゝ、あゝ……♡♡」

「気持ち良い？ 言ってみな」

「おゝ♡」

乳首を口に含んで舌先でぎゅう♡と押し潰してやると、恒一は首を仰け反らせて啼いた。迅の言葉を理解したのか、首筋を晒しながら震える声で答える。

「あゝ……ッ♡、き、もゝち、いゝ……ッ♡」

「ん？」

「……っ、あゝ……？あ、ち、ちくびいゝ、ぎもちいゝ……ッ！♡」

眉を寄せて泣きそうな顔をしながらも必死になって伝えようとする恒一の様子が可愛くて、思わず笑みがこぼれる。じゅっ♡と音を立てて強く吸い上げて離すと、恒一は体を震わせて嬌声を上げた。

「あッ♡あうッ♡」

まな板の上の鯉のように布団の上で横たわっている恒一のスウェットをずり下ろし、足から引き抜いてしまう。下着は貸さなかったから、先走りに塗れたチンポがブルンっ♡と露わになった。血管が浮き出るほどに勃起していて、腹につきそうなほど反り返っている。半分ほど被った皮に包まれた亀頭の色が濃く、血が集まっているのを感じた。

「ん、うゝ……ッ♡」

「ちんちん触ってほしい？」

先端からはとろとろと透明な汁が垂れており、陰毛をしつとりと湿らせていた。指先で先走りを掬い取って亀頭に塗り付けながらわざとらしく優しい声で言うと、恒一は羞恥に顔を歪めつつ小さく首を縦に振った。亀頭を皮ごと手のひらで包み、先走りの滑りを使ってゆっくりと剥き降ろす。にゆるり♡と顔を出す亀頭を親指で撫でると、ビクンッ♡と体を強張らせた恒一の腹筋に力が入って筋肉が隆起した。

「あゝ……ッひ、いあゝ！♡♡」

迅がそう言いながら手を上下に動かし、竿全体を抜く。恒一は身悶えして踵を布団に擦り付け腰を振る。

感度が良いのは迅としては気分がいいが、こんなに敏感では生前まともに女も抱けなかったんじゃないかと一瞬思う。だが今はもう関係ない。恒一は死んでいるし、迅の好き勝手に弄り回しても何の問題もない体だ。

「おッ♡おゝおゝ……ッ！♡♡」

「すごい声出るじゃん。もっと言えよどこがイイ？」

迅の手の中でチンポの先端がヒクつき、先走りが滴り落ちる。恒一は顔を薄く上気させて喘ぎながらも、どこか恥ずかしそうに唇を噛み締めていた。それでも体は快感を求めてか勝手に腰が動いてしまうようで、迅の手に自分のものを擦り付けるようにして小刻みに動いている。にじゅ♡ぐじゅ♡と小さく淫猥な水音が響いた。

「こうやって竿扱かれんのが好き？」

「っは、あゝ……ッ♡あうゝ、うゝ♡」

「それとも先っぽくちゅくちゅされんのが好きか？」

「おあッ！♡……ッあゝあ！！♡♡♡」

ねっとり絡みつくカウパーを亀頭に塗り込めて、手のひらでそこだけを包み込んで小刻みに激しく扱く。ちゅぷちゅぷちゅぷ♡と粘っこい音を響かせながら手を動かすと、恒一が腰を突き上げて叫んだ。腹から太ももに力が入って筋が浮かび、ググ、と腰が浮き上がる。

「あッ、ひッ♡あゝ……うッ！♡あゝ……ッ！！♡♡」

「やっぱ先っぽの方がいいみたいだな。でも亀頭だけじゃイけねえよな」

反対の手で硬く隆起した太ももを撫でながら、手首を回すようにして手の中の亀頭を捏ねる。普段包皮に覆われている亀頭は敏感だが、そこだけを刺激して射精できる男は少ない。恒一もカクカクと腰を突き上げ射精したようにチンポを脈打たせているが、溢れるのは濃い先走りばかりだった。

「あゝ……ッ！？♡♡おゝッ♡」

「気持ち良いなあ。射精したい？」

「いゝ♡♡……ッ！♡んゝッ……！♡♡」

迅の問いかけに、恒一は何度も首を縦に振る。しつこく亀頭を撫で回しながら、腰を浮かせたまま自分でチンポを握ろうとする恒一の手を掴んで指を絡めて握る。片手しか拘束していないのに、恒一は指を絡めて握る迅の手に縋り付くようにもう片方の手も添えてくる。

「おゝ……ッ！♡♡あゝッ！♡♡」

「ちゃんとイきたいって言えよ。出したって」

爪先をキュッと丸めてどうにか快感をやり過ごそうとしている恒一に言いながら、パッと亀頭から手を離した。へたるように腰を落とした恒一の亀頭の窪みがくぱ♡くぱ♡と名残惜しそうに動くのを見下ろしながら

ら、指の腹でゆっくりと裏筋を撫で上げた。途端、恒一が堪らないといった風に腰を揺らめかせ、涙を滲ませた瞳がぎゅっと閉じられる。

「ひぐッ、……う、あッ♡……ツイ♡」

「んー？」

「いぎだい、です、う……ッ♡」

喉の奥が潰れたような涙声で、恒一が迅の手を握り締めながら告げる。ぐずぐずと鼻を吸いながら、こっちをじっと見下ろしてくる。目に浮かんでいる涙は血の色をしておらず、白濁した黒目を潤ませていた。

「あッ！？♡♡ひいッ！♡あー……ッ！！♡♡」

「いいよ、全部出して」

はちきれんばかりのチンポを握り込み、根元から絞り上げるように圧をかけながら抜く。カリの段差を通過すると、恒一の腰が跳ね上がった。にちゅ♡ちゅぷ♡と音を立てながら手を大きく上下に動かして射精を促す。

「あッ！♡あッ！♡♡いッぐ♡♡……うッ♡♡いぎまッ♡♡」

「ちゃんと言えてえらい」

「イぐ……ッ♡あゝあゝ……アッ！？♡♡」

射精寸前の恒一のチンポをと扱きながら、迅は恒一の股の間に身を乗り出した。射精の宣言をうわ言のように口走る恒一を笑いながら、大きく口を開けて弾けそうな亀頭を口に含む。驚いたような高い声を上げた恒一がビクンッ♡と足の先までピンと伸び切らせて仰け反った。竿を激しく扱きながら舌全体で亀頭を舐めしゃぶり、じゅう♡と吸い上げてやる。

「おゝ、あゝ……ッ！！で、出まゝずッ♡♡あッあッ♡ッ……んゝんゝッ……～～！！！！♡♡♡♡」

「んむ……ッ♡」

ドブッ！♡ビュルルルーッ！♡と勢いよく吐き出される大量のザーメン。雄臭さに迅の鼻腔が満たされて、口の中いっぱい広がる濃厚な雄の味に頭の奥がジンジンした。舌に絡みつくゼリーのようなザーメンを受け止めながら、ちゅるっ♡ちゅうっ♡と音を立てて吸い上げる。

「あゝッ！♡♡あゝあゝッ♡♡」

恒一は体を弓なりに反らせて痙攣している。迅が射精中のチンポを咥えて吸い上げたせいだ。腰を揺らして必死に逃げようとしているようだが、迅は片腕で太ももを押さえ込み、もう片方の手を尻に回して引き寄せているため逃げられなかった。むしろ逆に腰を押し付ける形になっているため、より深く飲み込まれてしまっている。

「んん`.....ツ」

音を立てて口からチンポを引き抜くと、手早くティッシュを引き抜いてそこにザーメンを吐き出す。口に残るネバついた感触を舌で拭いながら、ぐったりと体を投げ出している恒一を見下ろした。散々嬲られた亀頭は真っ赤に腫れ上がり、ヒクヒクと痙攣している鈴口から残った精液がトロオ♡と溢れ出していた。血色はますます良くなり、唇や乳首の先端が仄かに赤みを帯びている。

「気持ち良かったなあ？」

「あ`.....♡」

「嫌なこと忘れられただろ？」

射精の余韻で惚けたままの恒一の腹に手を這わせながら、迅はそう言った。恒一は頷いて、呆けた顔のまま天井を眺めている。その間に

と恒一の両膝を立てて開かせ、腰の下に自分がいつも使っている枕を押し込んだ。肉厚な尻が上向いて、親指で肉山を広げると先走りで濡れたアナルが晒される。

「あッ！？♡♡」

少し力を込めて圧せば既にカウパーで濡れていたそこは、容易く迅の指を迎え入れた。指先をにゅぷり♡と埋めてみても、恒一は特に抵抗することなく大人しくしている。

「うゝ……ッ♡んあゝ♡」

「前立腺弄られんの好きだもんな」

「あゝ……ッ♡♡」

「昨日みたいに声出して。もっと聞かせて」

指を二本に増やし、肉壁を押し拡げる。そして恒一の弱いところを探し当て、こりゅ♡と押し上げる。恒一は目を見開き、ガクンと腰を跳ねさせた。迅の指を肉筒で締め付けながら、口の端から涎を垂らす。

「おッ♡♡おッ♡♡おゝぐッ♡♡うゝッ♡」

「おー、すっげえ声。もっとイイとこ触ってやるから教えろ」

前立腺をぐりゅぐりゅと押し込まれ、腹の中から快感を与えられて、コウイチは喘ぎ声とともに迅に應える。男の指を二本咥え込み好き放題弄られるまま、迅の手に反応してビクビクと震えた。

「お`ッ♡♡ぞごきもちい`ッ♡♡ぜんりつせ、ん`ん`.....ッ♡♡あ`ッ！♡♡」

「ここな？」

「う`ん`.....ッ♡ぎも`ちい`♡♡い`い`ッ♡♡♡」

恒一は迅の言葉に何度も首を縦に振った。問われるまま答え、もっと、と言うように自分で自分の足を抱え上げた。そうしろ、と昨日迅が言ったのを覚えていたようだ。

晒された腿裏を撫でながら褒めると、恒一が膝を両腕で抱え込んだ。自分で胸の方に膝を引き寄せたために、迅の指をくわえたアナルも金玉もチンポも全て晒した扇情的な姿勢に迅の興奮も煽られる。

「奥は？」

「ッお`ぐ.....♡うう`、んッ♡」

三本目の指も押し込んで根元まで含ませ、指先で肉壁を撫でる。きゅう♡と窄まった肉輪に逆らって引き抜きまた押し込む。指をチンポ

代わりにしてピストンし、前立腺をひっかけると恒一が悲鳴じみた声を上げた。

「あッ！♡♡あゝ……っ♡あッ♡♡」

指を開いて腸壁を拵げてみるが、恒一は陶然とした顔のまま口を半開きにして喘いでいた。枕を敷いたせいで腰が持ち上がり、勃起したチンポがへそまで達している。腹筋に押し付けられ、下腹に粘液を撒き散らしながら快感にヒクつくそこは、二回目の射精も近そうだ。

「おッ！♡♡おッ！！♡♡」

「お尻も気持ちいいなあ」

「あッ♡♡うあゝ……ッ！♡♡♡」

「クパクパしてエロ……♡」

ぬぽっ♡と指を抜き去ると、ヒクつくアナルが赤い粘膜を覗かせながら開閉している。空になった肉壺が切なそうに窄まる。迅がハーフパンツと下着をずり下ろして自分のチンポを扱いて見せると、恒一は鼻にかかった声を漏らしながら目でそれを追いかける。すでに勃起していたチンポは軽く擦っただけでビキビキと血管を浮き立たせ、鈴口からはカウパーが滲む。

「ん`う♡♡.....ッ！♡♡♡」

恒一が期待するように喘ぐのを見下ろしながら、片手で太ももを支え、もう一方の手で亀頭をアナルに押し付ける。チンポを欲しがって吸い付いてくる肉輪がくちゅ♡くちゅ♡と亀頭をしゃぶってきて、迅はその刺激にブルッと身を震わせた。

「あ`ッ♡♡ん`.....ッ♡♡♡」

「っは.....、もうチンポ咥えるの覚えちゃったな？」

「お`.....♡♡お`ッ！♡♡っあ`ん`ん`う`う`.....ッ！！！！♡♡♡♡」

締め付けの強い肉の輪を押し拡げて亀頭を挿入し、そのまま体重をかけて狭い肉筒を奥まで割り開いた。性急に奥まで開かれた恒一が押し出されるような呻き声を上げるが、その声音はどうしようもなく蕩けていた。

むっちりと厚みのある尻に下腹を密着させてチンポを根本まで飲み込ませ、迅は熱い息を吐く。

「お`お`.....ッ！♡♡♡」

「っあ`.....！♡♡すげえなこれ.....ッ！」

「お`ッ♡♡お`ぐっ♡♡お`ッ♡♡」

ぐりゅ♡と捏ねるように腰を動かせば、恒一は枕に頬を押し付けるようにして首を逸らした。迅のチンポに絡みつく肉襞は柔らかく、それでいて締め付けと蠕動を繰り返して精液を搾り取ろうとする。昨日も恒一の胎内は具合が良かったが、今日のほうがさらに凄い。

「あ`ッ♡♡ッ♡♡」

「昨日よりヤバ……っ」

「お`ッ……！♡お`んッ！！♡♡」

ずるずると引き抜き、ごちゅんッ！♡と最奥まで突き入れる。恒一の目が見開かれ、押し潰されたような濁った悲鳴が迸った。先程まで指で可愛がっていた前立腺を迅の亀頭に挟まれ、抱え込んだ膝を震わせている。その膝を掴んで開かせ、上体を倒して恒一の体に伸ばしかかった。

「お`ッ♡♡あ`あ`……ッ！♡♡お`ッ♡♡♡お`う`う`ッ！♡♡♡」

「はあ`……っ！すげえ……♡」

ゆっくりとしたピストンで内壁でチンポを扱き、時折最奥まで突き入ると恒一が背を弓なりに反らして肉襞を絞り上げる。はっ♡はっ♡と喘ぎ混じりの浅い呼吸で迅の肉棒を受け止め、震える手を背中に回してくる。ほんのり暖かい手のひらが背中に触れ、縫るように肩口へ滑っていく。

「うぅぅ……っ♡♡じん`ッさ♡あ`……っぐぅ♡♡」

「……その呼び方がいいな。もっと呼んで」

「うぅっ♡♡じん、さん`……っ♡♡じん`、さん`……っ♡♡」

必死になって迅の首元に額を擦りつけ背中に縫う恒一の呼び方に、迅から与えられる悦楽に翻弄され情けなく震える鳴き声に、支配欲にも似た満足感がじわりと広がる。自分の手管を打算計算なく素直に受け止め追い詰められる恒一の痴態は、迅の欲望を際限なく掻き立てた。

「かぁわいい♡お前かわいいなあ……」

「ん`っ♡ッう`♡う`……ッあ`……！！♡♡」

恒一の肩を撫でてやりながら、ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡と腰を打ち付け続ける。片手を恒一の頭の後ろに回し、髪を掴んで顔を上向かせた。

薄く上気した恒一の顔が露わになって、迅のチンポに貫かれ身の奥から込み上がる恍惚に蕩けたそれをじっと見つめる。

薄く靄のかかった恒一の黒目と視線が絡んだ瞬間、みっちりと媚肉が狭まってきたので奥まで腰を押し付けて動きを止めた。

「お`ッ♡♡お`ッ♡♡」

「っは.....♡すげえ締まる.....！♡見られてんのも気持ちいいんだ？」

「は、あ`ッ.....♡あ`ッ♡うう`.....ッ♡」

きゅう♡と締め付けては恒一の体の強張りに合わせて引き攣る肉壁の愛撫をチンポで受け止め、熱心な動きに快感が駆け上がり頭の奥が痺れる。恒一は迅と目を合わせたまま自分の良いように腰をへこつかせ胎内をうねらせて悦楽を貪ろうとしていた。

「い`ッ♡ひ、イ`.....ッあ`♡」

「気持ちいい顔してんな、自分で腰動かして」

「や`.....あ`ッ♡あ`ッ♡」

「やだってお前がやってんじゃん。すっかりケツ掘られんの好きになっちゃったなあ」

恒一の後頭部を掴んで視線を絡めたまま、ピストンを再開する。恒一が視線を逸らそうとすれば髪を引いてこちらを向けさせ、上半身は密着させたまま腰だけの動きで尻を犯す。ごちゅっ♡ぬちゅっ♡と粘った水音をたてて粘膜を擦り合わせながら、顔を歪める恒一を見つめた。

「お`.....ぐ、うッ！♡.....お`ッ♡お`ッ♡♡」

「あ.....ケツ締まってきた.....ッ♡ケツでイキそう？♡」

「ん`ッ.....う`う`♡う`、ん`.....ッあ`、わかんない、い`ッ♡」

ビク.....ッ♡.....ッビク♡と断続的に男の体が強張り、突き入れられるチンポを包み込むように濃厚に媚肉が狭まっていく。戸惑って首を横に振る不安そうな恒一に、迅は腰を動かしながら空いた手で指を絡めて繋いだ。ぎゅう、と力を込めて握られ、ひどく気分が高揚する。

「怖くねえよ、気持ちイイだけだから。ほら言えよ、気持ちイイって」

「あ`、う`う`.....ッ♡♡う`、い`いッ♡ッ♡ぎも`ちいい.....ッ♡♡♡」

「目反らすな、こっち見てろよ.....」

にゅちゅ♡ぬちゅッ♡ぬちゅ♡と締まる肉襷を擦り上げながら、執拗に活塞を続けた。口走るたびに自覚するのか、恒一がアクメに押し上げられていく様子が手に取るようにわかる。

「んっ、……ほら、イケ♡」

「うッ♡♡あゝ、あッ……～っ！！♡♡あゝッ！♡♡イゝぐッ♡イゝ……ッ  
ぐううううゝ……～っ！！♡♡♡」

恒一の全身に力が入って、絞り出すような嬌声がこぼれる。恒一の顔が真っ赤に染まって、眉が悩ましく歪み、口が酸素を求めるように開閉して喉の奥から音にならない嬌声が迸った。抱え込んだ足の爪先までを強張らせ、ビクビクと全身を痙攣させて射精の伴わない雌の絶頂を享受する。全身を震わせながらも、無意識なのか迅の腰に足を巻き付けてきた。チンポを引き留めてアクメに震える肉壁でしゃぶり尽くす。

「は一、すっげえな……」

「あゝ……ッ♡あゝ……ッ♡おゝ、おゝ……ッ♡♡」

雄肉を食い締めて蠕動する肉壁のあまりの快感に迅はグッと奥歯を噛み締めた。このまま恒一が落ち着くまでじっとしてやった方が優しいことは知っている。だが、それ以上に恒一の淫猥な反応を見たい。射精以外の絶頂は終わるまでが長く、恒一は深く長いアクメの中にいる。肉壁がヒクつきながら蠕動する感触を味わいながら、迅は恒一の耳元に唇を寄せて囁いた。

「……ッ♡チンポしゃぶるのやめらんねえな？もうイッたのになあ？」

「ッ、あゝ、おッ！♡♡いゝッ♡あゝ……っんゝ、ッ！♡」

煽って半開きの唇に食らいつくと、恒一が目を丸くする。構わず舌を突っ込んで口内を舐め回し、舌を擦り合わせて食った。アクメ直後の濃厚なキスに恒一の目がうっとりとし、蕩け、健気に応えてくる。迅の舌を追いかけて、肩に縋っていた腕でより強く縋りつき腰に足を巻き付けたままへこへこ♡と尻を振った。

「んうゝ……♡ふ、あゝ♡」

「ッん……♡」

ぬちゅ♡ちゅるっ♡と卑猥な音を立てて口腔を貪り合い、互いの舌を絡め合う。恒一は夢中になって迅の口の中を貪り、迅の舌を捕まえて舐め回した。そんな恒一を宥めるように腰を揺すってやると、甘ったるい喘ぎ声が漏れる。そうしてねちっこく舌を絡めながら、迅はゆっくりとピストンを再開した。

「……ッ！♡おゝ、……んゝッ♡んゝッ♡♡」

恒一は声にならない喘ぎを漏らしながら、目を見開いて迅を見つめる。迅は恒一と視線を絡めたまま、ゆっくりと腰を引いた。散々乱れ蕩けた姿を見せ続けられ、躰けた肉壁がチンポに媚びて愛撫を続けるのを堪えていたがそろそろ我慢も限界だった。

吸い付いてくる肉壁を押し拵げ、カリ首に引っ掛けてから勢いよく奥まで突き入れる。ごちゅっ♡と重い衝撃が走り、恒一の体が跳ね上がった。

「うッ！♡♡あゝあッ♡♡あッ！♡♡」

「あゝ.....、俺もイきそ、っ♡」

口の端から涎を垂らしながら恒一が喘ぐ。迅はその表情をじっと見つめながら、肉壁を蹂躪する。恒一の膝裏を掴んで足を大きく開かせ、角度を変えて責め立てる。結合部からは泡立った液体が漏れ出て、シーツに染みを作っていた。

「お前のケツでイかせて♡」

「あゝあッ♡♡じんゝさんッ♡♡♡じんゝさ.....ッ♡♡」

迅は恒一の足を掴み直し、ラストスパートをかける。肉棒を引き抜き腰を打ち付ける動作を繰り返し、衝動の赴くままに狭い肉壺でチンポを抜き上げた。肌同士がぶつかる音と水音が部屋に響き渡る。

「あゝ、あゝッ♡♡あゝッ♡♡おゝッ♡♡おゝッ♡♡おゝ、あゝッ！♡♡」

「ぐ……ッ、イっく……ッ！♡♡」

腰の奥から込み上げる射精感に突き動かされるまま、腰を叩きつけて一番奥で射精する。びゅううううっ♡♡と勢いよく吐き出しながら、腰を震わせて最後の一滴まで出し切ろうと何度も揺すった。恒一は迅に足を絡めたまま腰を押し付けてきて、胎内の深いところで受け止めている。

「は、あゝ……♡おゝ……ッ♡♡」

「……っ、は……あ」

ゆっくりと脱力し、恒一に凭れかかる。重たそうな様子もなく受けとめて背中を撫でてくる恒一のアナルから、ぬぽ……ッ♡とチンポが抜ける。息を整えながら見下ろすと、恒一はまだ快樂の余韻に浸っているのかぼんやりとしていた。目尻からこぼれる涙を拭ってやり、前髪を掻き上げてやる。

「恒一」

「.....あゝ、あゝ.....ツ♡♡」

緩やかに瞬きをした恒一は、ぼや、とした顔でこちらを見上げてくる。大きな体を持つ男が自分に組み敷かれて雌の顔を晒している事実满足して、迅は濡れた唇に軽く吸い付いてすぐに離れた。

「嫌なこと思い出したらまた来いよ？またやろうな」

「あ、.....♡」

「あと、俺が呼んだらすぐ来いよ、いいな？」

頬を撫でながら言うと、恒一は僅かに頷いた。言われている意味をしっかりと理解してる様子で、膝を擦り合わせている。

これでしばらくは性欲が溜まることもないなと迅は思った。おまけに見た目も反応も好みの男だ。死んでいるなら体調不良も何もないだろうし、病気だってそうだ。なぜ触れるのかは分からないが、死体でもないのだから死んだ人間がかかる病気であろうはずもない。都合のいい相手がいたもんだ、と心の中でほくそ笑んだ。

# 奥付

作品名:事故物件の怪異が好みすぎて我慢できない

著者:藤 時生

発行日:2026年8月1日

発行場所:FANBOX／BOOTH／DLsite

お問い合わせ:作者SNSまたは各販売サイトの連絡先をご利用ください。

© 2026 藤時生

All Rights Reserved.